
女の子のうた

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子のうた

【Zコード】

27136

【作者名】

つきてつくる

【あらすじ】

高校一年の夏、ふとしたきっかけで、ゆみ子はなぞの美少女と知り合った。声はハスキーで男言葉をしゃべるし、行動パターンがとても乱暴。おまけに自分のことをヨウスケと名乗っている。変なやつ、と思いつつ、ゆみ子は次第にその女の子に惹かれてゆく……。

飯野こゆみ先生に捧げる小説です。

出でいはある日突然に

「Jの小説を、飯野じゅみ先生に捧げます。

テディーベアのヌイグルミの中にかくしておいたピンクのローターを、ママに見つかつてしまつた。

どうやらあたしの留守中、勝手にスイッチが入つて動き出したらしい。ママが、あたしのシーツを洗濯しようとベッドへ近づいたところ、ナイトテーブルのわきに置かれていたダッフィーのテディーベアが、ぶいーん、ぶいーんとリズミカルに唸つていたのでびっくりしたのだという。

おかげであたしは、学校から帰るなり大目玉を食らつてしまつた。「こんなもの、どこで買ってくるのよ…」

今どきローターなんて健康グッズのお店でふつうに売つてゐし。「あんたには、まだ早いわよ」

なに言つてるの、もう高一じやん。

「とりあえずこれは、お母さんが処分しておきますからね」やーん、千八百円もしたのにーー。つてこいつが、こいつ自分で使うんじゃないでしょうね。

「こんなわけの分からぬもの置うんだつたら、しばらくお小遣いはあげません！」

もう最悪ーー！

つてなわけで、台風一過、ピーカンの青空のもと、せっかくの日曜日だというのに、あたしはぶすつとふてくされながらスター・バッカスのテラス席で、甘つたるいフラペチーノをかきませていた。

「きやははー、ゆみ子つてば、ちょーデジっ子」

親友の沙織が、可笑しく述べたまらないといったふつて足をばた

つかせてこる。あたしは、いよいよほっぺたを膨らませ、冷たいホップクリームをむりやりのどに流し込んだ。

「あたしのせいじゃないもん、テディーのせいだもん」

「バカねー、使わないときはちゃんと電池抜いておきなさいよ。アダルトグッズなんてのはねえ、ほとんどがメイド・イン・チャイナなのよ、ショートして煙が出てきたなんて話もよくあるんだから」「もうぜつたい買わない」

「うふふ、そのうちまた欲しくなるつて」

「彼氏つくるもん」

あたしは、さんさんと陽のふりそぞぐオープンカフェの全景をぐるっと見渡してみた。休日の午前十時、駅前のスタバはカップルの姿であふれかえっている。ここで待ち合わせをして、それからデートへ繰り出すというのか。もう、羨ましいつたらありやしない。

煎つたコーヒー豆のにおいを胸一杯に吸い込んでから、ため息といつしょに吐き出した。

「あーあ、どつかにあたしの」と好きになってくれる、カッコ良い男の子つていなかなあ」

「いるいる、あんたルックスちょーイケてんじやん。その気になつて声かければ、ケーキにたかるアリみたいにつじやつじや寄つてくれるつて」

「いや、そういうんじやなくつてさ」

あたしは、グロスの光るくちびるをペロリと舐めてから、汗をかいたコーヒーカップをコースターの上に戻した。

「もつといつ運命的な出会いがしてみたいのよ、身を焦がすような恋つてやつ? できれば、ちよつぴり危険なシチュエーションとかでさ」

「ばーが、ハーレクインロマンスの読み過ぎ」

「そとかなー」

カフェから見下ろす駅前のロータリーで、鳩がいつせいに飛び立つた。鳩の群は、風になぶられる女の髪の毛みたいにぐねぐねと形

状を変えながら、銀色の水しぶきを散らす噴水の方へと向かつてゆく。

沙織の携帯が鳴った。

「あ、ケンジからメール」

素早く内容をチックして、彼女はちょっと困った顔であたしを見上げた。

「じつめーん、ケンジのやつ、これから一人でじつか行こうだつてキツネのしつぽみたいにストラップのじゅらじゅら垂れ下がつた携帯をぱちんと閉じて、片手でおがむまねをする。その表情がいかにも嬉しそうだったので、なんとなく憎らしくなつた。

「遠慮しないで行きなよ、あたしは一人ぼっちでも生きてゆける少女なんだから」

「そう、へソ曲げないでよー。ケンジの友だちにカッコ良い子いたら真っ先にゆみ子に紹介するつてば、ね？」

「べつにいー、期待してないしー」

あたしは、ふんと鼻をならし、憮然とした表情でチョココレートマフィンにぱくついた。どうせ恋人もいないし……、太つてやる。そんな様子を、沙織はあきれた顔で見つめている。

「ほんと、ゆみ子つてチョコ好きだよねー。あんたとキスしたら、きっとチョコの味がするでしょつね」

「試してみる？」

「遠慮しとく」

ぱりん。

溶けかかった氷のかけらを噛み碎き、沙織がそつぽを向いた。その耳元で、赤い石の入ったきれいなピアスがふるんと揺れた。たしか、以前ケンジに買つてもらつたと自慢してたやつだ。

「あれ？ でも沙織つてさ、この前ケンジと大喧嘩したばかりだよね。別れる一別れる一つで騒いでたくせに、もう仲直りしちゃつたわけ？」

「う、うん、まあね……。誕生日に、カルティエのラブリング買つ

てくれるってゆーから、より戻しちゃつた。へへ

「ふう……、あいかわらず打算的な恋愛してるのね。惚れたはれた
も金しだい、つてか？」

「ほつとけ、ばーか。物欲と性欲が、今のおたしをつき動かす原動
力になつてんのよ」

言いながら、沙織はコンパクトを覗き込んで素早く自分の顔をチ
エックした。

「頭くるなあ、ファウンテンショットをソーカットのやつにかえてか
ら、マイクのノリが最悪」

「紫外線なんて気にしなくていいのに……」

どうせ面の皮厚いんだし、と小声でつぶやいたのをしつかり聞か
れてしまった。

「やかましいわ」

イスの背もたれにどんと体重をあずけ、薄田をあけて空を見上げ
てみる。

昨日まで荒れ模様だった空は、今日は一転、それまでの憂さを晴
らすかのように澄み渡り、どこまでも硬質な「バルトブルー」は鋭い
夏の陽射しの連続スペクトルをたたえながら無限の広がりを見せて
いた。何も考え出がけにはおつてきたブラックデニムのジャケット
が、熱を吸収して蒸しタオルのようになつてている。フラペチーノ
の残りを一気に飲み込むと、そのときだけ一瞬汗がひいた。

「じゃ、ワリいけど、あたしそろそろ行くわ」

沙織が自分の飲食分、きつちり八百十九円を置いて立ち上がろう
とする。あたしは、あわてて言った。

「あ、送つてくよー」

「いいよ、こんな短いスカートはいてバイクの後ろなんか乗れない
もん」

「……だよね」

たしかに膝上二十分のフレアミニをはいてタンデムシートに
またがるのは危険だ。道行く男たちに田で犯されちゃうし、へたを

すりやあ携帯で写真撮られまくるかもしれない。

でも、そう言つあたしだつて、フェイクレザーのホットパンツをはいている。素足の美しさには少なからず自信があつたりする。

「あんた、そんな格好してバイクでこけたりしたら、マジお嫁に行けない体になるわよ」

「こけないもん。あたし運転上手だもん」

ほんとは今朝も出がけに立ちこけして、おじいちゃんの大切な植木を半ダースほどおしゃかにしてしまった。でもこの陽気、ライディングパンツなんてはけない。

熱々ベタベタのカップルたちをかき分けるようにして店を出ると、安全運転しろよー、と捨てゼリフを残し沙織は駅のほうへ去つていった。その後姿を見送つてから、あたしは颯爽とガード下にある駐輪スペースへ向かう。そこには通勤用のチャリにまじつて、数台のバイクがこつそりとめられていた。

その中でもひときわ目を引く美しいカー・ディナルレッドのボディ、あたしの命の次に大切な愛車ヤマハ××ビラーゴ。アメリカンタイプの可愛い一百五十五CCバイクだ。

「あたしには、あんたがいるもんねー、ぜんぜん寂しくなんかないよーだ……ぐすん」

頑丈なケーブルロックをはずしシートにまたがると、ツインのリヤサスペンションがぎしづと深く沈み込んであたしの体重を受けとめる。傍若無人に前方へ突き出したフロントフォークがなんとも挑発的で、あたしのちっぽけな矜持に火をつける。自慢じゃないけど、ほんとは自慢だけど、うちのがっこでスクーター以外のバイクに乗つてる女の子は、あたしだけだ。

ビンテージスタイルのハーフヘルメットをかぶる。白地にチエリーピンクのラインが入つたやつ。ゴーグルは水中眼鏡みたいデザインでちょっとびり恥ずかしいけど、装着したとたん視界にモノトーンのフィルターがかかつて、俄然あたしを非現実的な世界へといざなつてくれる。

さてと、どこへ行つてやううか。
どこでもいいや。

みじことに晴れ渡つた夏空。

十七才という多感な年頃。

自由にバイクを駆つて未知の世界へ飛び出せば、どこへ行つたつて、きっと何がしかの面白いことが待ち受けているに違ひないんだから。

両足を踏ん張つて思いきりふんぞり返ると、あたしは力一杯キックスター・ターレバーを蹴り込んだ。

ガコーン。

瞬間、去年死んだおばあちゃんの、しわだらけだけ優しい笑顔が浮かんだ。

ゆみ子は、本当におてんばさんね。

だめ、エンジンかからない。

もう一度。

今度は、現国の大山教諭の陰険なカマキリ顔を思い浮かべながら、怒りと憎しみをこめて思いつきリレバーをキックした。

ガコーン。

ドツ、ドツ、ドツ、ドツ、ドルルーン！
おーけー。

独特の断続的なエグゾーストノートを放ちながら空冷V型エンジンが息を吹き返す。重低音で唸りをあげるキャブレターが、あたしのキューートなヒップをずんずん震わせる。この快感は、アメリカンスタイルのバイクでなきや味わえない。

カストロールモーター油の焼け付くにおいを胸いっぱい吸い込みながら、あたしは知らず知らずのうちに微笑んでいた。

さてと、行きますか。

バイクを発進させようと、腕に力をこめる。

と、そのとき。

突然、背後からほつそりとした腕があたしのウエストに巻きつい

てきた。ぎゅっと力をこめて抱きしめてくる。

「え、後ろにだれか乗ってるーー！」

慌てて振り向くと、そこには精悍な顔つきをした美少女の鋭いまなざしがあった。

「きやあ、だだ、誰よあんた？」

しがみつく腕を振り払おうと懸命にもがくと、彼女はあたしの目をまっすぐに見つめ返しながら、女の子にしてはちょっとハスキーな声で怒鳴った。

「いいから、早く出せってば！」

「冗談じゃないわ、ちょっと降りなさいよ！」

「頼むってば、追われてるんだから
え？」

「うへへへ……。」

出合いはある日突然に（後書き）

飯野じゅみ先生、お誕生日おめでとうござります！

べいびー逃げるんだ

「ゴーグルをずり上げて、その美少女の顔をまじまじと見つめた。きゅっと上がった目もどが勝ち気そうな感じだけど、なんていうかオリエンタルな感じの美人で、髪をアップにして浴衣なんか着せたらすごく絵になりそう。たぶん、ほとんどノーメイクだと思うけど、でもファッショングの『街角で偶然みつけた美少女』みたいな「一ナード」にふつうに写真が載つていいそうな、あでやかで華のある顔立ち。

ただ、外見の美しさもさることながら、彼女からは何だか不思議なオーラが感じられる。どこか普通じゃない。奇妙にエキセントリックで、それでいてチープというわけでもない。たぶん神秘的と言つたほうが正しいのかもしれない。

とにかく、その風変りな美少女が、今あたしの背中にべつたりとはりついている。予想もしていなかつた突飛な出来事に、ついあたしの声もうわざつてしまつ。

「追われてるって……、誰によ？」

そう訊ねると、彼女は振り返りもせず、右手の親指だけで背後を指し示した。

「あいつら

「げつ」

見ると、若い男が三人、もの凄い形相でこちらに向かって駆けてくる。一見して、道徳や社会秩序なんか屁とも思つていませーん、みたいな人相の悪いお兄さんたち。あたしのデリケートな心臓が、エイトビートを刻みはじめた。

「なつ、なつ、なんなのよ、あいつらは？」

「強姦魔」

「う…………」

「ほら、早く出せよ。捕まつたら、あんたも一緒にヤラれちゃうよ」

や・ら・れ……ちやうーつ？

背中から嫌な汗がぶわーっとふき出し、あたしは無意識のうちに愛車ヤマハ・ビラーゴを急発進させていた。後輪が乾いた路面をじゅりっと噛むと、慣性の法則で上体がぐんと反り返る。あたしの腰にしがみつく彼女の腕にも、ぎゅっと力が入った。

と、とにかく逃げなくちや。

つていうか、なんでこんなことになっちゃうのよーつ！

バックミラーを覗き込む余裕さえなく、あたしは無我夢中でバイクを走らせた。駅前の広い通りへ出ると、前方に右翼の街宣車が軍歌を垂れ流しながら進路をふさいでいたので、強引にわきをすり抜ける。追い抜きざま、ハンドスピーカーからもの凄い勢いで罵声が飛んできた。

「こりあ！ なんだお前らーつ、めりけんのバイクになんか乗りやがつてーつ

つるさい、ばかつ。

そこで一気にバイクを加速させた。

朝、家を出たときにはまだそこらじゅうに水たまりがあつて、それが朝日を受けてまるでスパンコールのドレスみたいにきらきら輝いていたけど、今は乾ききった車道にゅらゅら陽炎が立ちのぼつている。空から照りつける眩い陽射しと、四サイクルV型一気筒エンジンが放つ熱気であたしの体は火照り、急激にのどの渴きをおぼえた。

信号を五つほど越えたところで、後ろに乗せた美少女がノーヘルだということに気づく。

やばい、警察につかまる。

あわてて次の交差点を左折した。空室だらけのテナントビルが建ちならぶ、寂しい裏通りへと出る。車は一台も走っていなかつた。そこで、あたしはゆっくりとバイクを路肩へよせ、バックミラーを確認した。

よし、誰も追つてこない。

あたりまえだ。徒歩でバイクに追いつけるはずもない。よつやく人心地がついて、あたしはバイクを停止させ、大きく息を吐き出した。

「ふうー、どうやら無事逃げられたようね」

どれだけ走っていたのだろう。たぶん、ものの十分と経つていなはずだ。でも、この一瞬の逃走劇が、あたしにはもの凄く長い時間に感じられた。

「コーグルを持ち上げ、後ろに向かつて声をかける。

「もう大丈夫よ。まあ、早く降りてちょうだい」

返事がない。

「ねえ、降りてってばあ」

答えるかわりに、腰に回した腕にぎゅっと力を込めてきた。どうやらあたしのバイクから降りる気はなさそうである。

「もう！ じゃあ、あんたの好きなところまで送つてあげるから。でもその前に、ちゃんとヘルメットかぶつてよね」

とたんに、はずんだハスキーボイスが返ってきた。

「お、さんきゅー。おめー、あんがい良いやつなんだな」お人好しとも言つ。

「んで、どこにあんのメット？」

「そこのサイドバッグの中よ」

タンデムシートの左右にぶら下げる大振りのバッグから、じいじそ予備のヘルメットを取り出して、彼女はちつと舌打ちした。

「なんだよー、この格好悪いデザインのメットは……」

「文句ゆーなら、もう乗せてあげない」

「わーった、わかりました」

ぶつぶつ文句を言いながら、そのショットヘルメットを頭からすっぽりとかぶる。セール品だったの衝動買いしたけど、デザインが気に食わなくて予備にしていたそのヘルメットは、なぜだか彼女によく似合っていた。

「あら、けつこうさまになつてるじゃん

「ほんとかあ？」

「ええ、本当よ。まるで二流のSF映画に出でてくる宇宙船のパイロットみたい

「なんだそりや？」

彼女と視線を合わせ、ふふっと笑つた瞬間、お腹がぐりと鳴つた。腕時計をのぞいてみると、あと二十分足らずでお昼だ。

「ねえ、どつかでランチしない？ もちろん、あんたのおじりでよ」返事をするかわりに、彼女が鼻をぐがつと鳴らした。それを了解の合図と受け取つて、あたしは再びバイクを走らせる。急発進にあわてた彼女が、あたしの背中にぎゅっとしがみついてきた。さつきよりも、ずつと強く……。押し付けられた乳房の感触がやけに肉感的で、あたしはついじきまきしてしまつた。

え、女の子同士なのに……なんか変な感じ。

ドーナツかクレープが食べたいと主張するあたしと、ラーメンが食いたいなどとわがままをぬかしめる彼女の、両方の意見を取り入れて、外資系スーパー・マーケットに隣接するバイキング形式のレストランに入った。ここは和洋中華なんでもありありの、およそあしたちが考えつくレベルのメニューなら、すべてそろつているという便利なお店だ。

九十分食べ放題、消費税込みで千五百円。

女子高生のランチタイムにしてはちょっと高い気もするけれど、でもどうせ支払うのはこの見知らぬ美少女だし。

席へ着くなり、彼女は取り皿を手に、大はしゃぎで料理を略奪して回つた。こういうお店では、人間の本性といつもの如実に現れるから気をつけなくてはいけない。間違つても、付き合いはじめたばかりの恋人なんかと一緒に来てはだめだ。

「ちょっとお、ラーメンが食べたいだなんて言つておいて、さつき

からせんせん違うものばっか口にしてるじゃん

「うつせーな、何を食おうが俺の勝手だろー。だいいち、こうこう

ところのラーメンってのは不味いんだよ」

あたしは、これも専門店などに比べると格段に味の落ちるチョコレートケーキをつつきながら、外見からは想像もつかない彼女の旺盛な食欲を、呆れながらながめていた。

「あんた、そんなにバカ食いして、よくプロポーション維持できるわねえ」

「まあね……、おかげで姉貴はだいぶ苦労してるみたいだけじ」「え？」

「あ、いや、なんでもない。こっちの話……」

食事が一段落したところで、あたしは喉元に引っかかっていた質問を彼女にぶつけてみた。

「ねー、どうして、あんなやつらに追われていたの？」

ダージリンティーをすすりながらそう訊ねると、なにか嫌なことでも思い出したのか、彼女の美しい顔が見る見る険しい表情へと変わつていつた。

「……どうしても聞きたいか？」

「聞きたーい。てゆーか、聞かないとストレスで死ぬ」とすると彼女は、頬杖をつきながら手を伏せ、ちょっとふてくされた感じでしゃべりはじめた。

「今日は、なんだか知らねえけど、やけに電車が混んでよ」

「まあ仕方ないわね。今月最後の日曜日だし、朝からピー^カンの天気だもん」

「ああ、でもそのせいで俺は、次々と乗り込んでくる乗客に押されて、ドアンところでカエルの標本みたいにべしゃつて潰れてたんだ。そしたらよ……」

「そしたら?」

「彼女の美しい瞳にめらつと炎がともる。

「誰かが、カーゴパンツの上から俺のケツを執拗になで回すんだ」「げつ痴漢? やだなあ」

「こつちはぜんぜん身動きとれねえしよー、後ろ振り向くつにも首

が回んねえんで、俺もあつたままで、屁でもひつかけてやるつかと思つたんだけど、

思わずダービーリンティーを吹き出した。

「なんだよ、きつたねーな、

「……『めぐ』

「ひゅーか、もうちょっと女の子らしく喋りなさいよな。なによ、それがやつな言葉づかい。

「でも、満員電車で屁なんかこいたらパーシクがあきるだら?、

「……やつやまあ、おきるでしううね」

「で、田の前のドアが開くまでじつとこりえて、開いた瞬間、自由に動くようになった手で、そいつの指ひつ掴んだんだ」「お、やめじやんー、で、叫んだのね?」Jの人痴漢でーす

「いや、

にやりと笑つた。

「その指へし折つてやつた」

「うわあ……。

「ず、ずいぶんと乱暴なことあるのね」「だつてよー」

彼女の頬が、ぷつーっと膨らむ。

「そいつ、ただ触るだけじゃないんだぜー。ケツの割れ田にわって指を這わせてくるんだ」

じついう感じでな、と言しながら彼女は、自分の指をあたしの田の前までもつてきて、くごつくごつと、やらしこ動きをして見せた。今度はダージリンティーが気管に入った。

「けほつ、けほつ」

「おー、もうそれ飲むのよせよ」

そう言つて身を乗り出してくるので、背中をわすってくれるのかなと思つてたら、あたしが涙田になつて咳き込んでるすきに、食べかけのチョコレートケーキを自分の口の中へ放り込んだ。ぱー。

「うん、美味しい。けつじつこけるねこれ」

「あー、それあたしのー」

「おめーってチョ「好きだな。キスとかしたら、あつとチョ「の味がするんだろうな」

「ふん、さつきも友だちに言われたわよ」

「ケーキを飲みくだし、自分の指をペロペロなめるその仕草がみょうに可愛らしくって、つい文句を言つ氣力が失せてしまつ。何だろう、この子……」

可愛い外見と、乱暴な言葉づかいのギャップが、みょうに心地よく思えて、あたしは戸惑いをおぼえた。この、奔放でいて爽やかな感じつて、いつたい何だろう?

何かに似てる。

……例えるなら。

そう、例えるなら、風。

春の風。

暖かくて、生命力にあふれ、とつてもたおやかで、それでいて時折びゅうーって強く吹く。やつと咲いたと思つた桜の花びらを無惨にも散らしてしまつて、でもぜんぜん悪気なんてなくて、さーっと吹き抜けてゆく。そして知らぬ間に、夏を運んでくる……。たぶん、そんな感じ。

そう、この子からは春風のよくな、しなやかな美しさを感じる。そう思つて、あらためて彼女の顔をまじまじと見つめると、あたしの視線から一瞬目を逸らして赤くなつた。

「なんだよー」

かつわいー。

「じゃあ、やつを追つて來たやつらは、その痴漢の仲間だつたつてわけね」

「ああ、集団で一人の女の子を取り囲んで、触りまくつてたらしい

……」

「ひつじー。でもあんた、あのときあたしと出合つていなかつた

……」

ら、今「」る大変なことになつてたかもね

「まあね……」

「感謝してる?」

「してるけどや」

「」で彼女は、ぐぐつと身を乗り出してきた。

「でも俺、バイクに初めて乗つたんだ。すげーな、バイクつて。スピード感がこう直に伝わってくるしょ、排気音なんかも、ずんずんつて腰を揺るがすくらう強烈で……。俺、けつこう感激したんだ。おめー、すげーな、女のくせにバイクとか乗り回してよ」

「へへへー」

バイクのこと褒められると、もうだらしないくらうに顔の筋肉が緩んでしまう。あたしつて、バイクばか。もつともつと褒めてくれたら、木にだつて登つちゃうかも。

「なあ、あのバイク乗つてどつか行こうぜ。峠のほうとか、海沿いの道とかさ。天気だつてこんなに良いことだし」

「うーん、でもあんまり燃料入つてないんだー。そうだ！ あんた燃料タンク満タンにしてよ。そしたらどこへだつて好きなとこ連れつてあげる」

あたしが指をぱちんと鳴らすと、彼女はがつくりと肩を落とした。「残念だなあ。俺、今の所持金、千二百三十円しかねえんだ」

「なーんだ、そうかあ……」

ちょっとがつかりして、ダージリンティーの残りを一気に飲み干した。

全部、吹き出した。

「えーっ！ じゃあ、この払いはー？」

答えるかわりに、彼女は鼻をぐがつと鳴らした。

「づく……。

レジで会計をすませ、あきらかに軽くなつたウォレットをお尻のぽつけに突つ込むと、切ない切ないため息がもれた。

あーあ、つまんないことで余計な出費しちやつたな。それだけでなくとも、今月はお小遣いもらえないといつのに……。

ちょっとブルーな気分のまま駐車場へ戻ると、あるおかしな美少女があたしのバイクにまたがつて、ぶおーん、とか、ばばばばば、とか叫びながら体を揺すつていた。

ほんと変な子。

でも、無邪気な笑顔がまぶしいくらい魅力的に見えた。ちょっと歯並び悪いけど、でもときおり唇の合間からのぞく八重歯が真っ白でかい。何かひとこと文句を言つてやるうと歩み寄り、しかし彼女と目が合つたとたん自分が何を言おうとしたのか忘れた。あまりに悪気のないその顔を見て、もう些細なことなど、どうでもよくなつてしまつたのだ。

なんか調子狂うなあ。

「ほんじや、帰ろつか」

ながば投げやりに言つと、彼女は急にバツが悪そうな顔をしてつぶやいた。

「……悪かつたな、いろいろと振り回しかまつてよ」

「いいよ、あんたどこるど、けつこう楽しいもん」

「それ本当？ ならいいんだけど」

はにかんだ笑顔を見せ、彼女がずりつずりつとお尻をずらしながらタンデムシートへ移動する。入れ替わるよつにあたしがサドルにまたがると、初めて出会つたときみたいに背後から腕がのびてきて、ぎゅっと腰にきつく巻きついた。

「おまえ……良い匂いがするな」

不意に彼女がつぶやく。

「え？」

突然、何を言い出すのや。でも、そんなこと言われたら悪い気はしない。

「いじりしりると、とりても良い匂いがするんだ」「口ロンの匂いかな？ でもお金なくつても、あんまり高価なもの使つてないんだけどね」

「いや、そういうんじゃなくて」

言いながら彼女は、あたしのジャケットの背中へ頬をすりよせ、髪のあいだに顔をうずめてきた。

「女の子の匂い……つていうのかな。ほんのり甘くて、ふわっと柔らかくて、でもちょっとだけ生ぐさい、みたいな」
「生ぐさいってなによ、生ぐさいって。

「なーに言つてるのよ、あんただつて女じやん」

「……」

一瞬、みょうな沈黙があつた。

「女の子……だよね？」

答えない。

「ま、まさか二コ一ハーフとか？」

「ひとをオカマみたいに言つな」

「だつて……」

「いいから行こうぜ」

「う、うん」

そこで、この余話はいつたん打切られた。

頭の中に浮かんだおかしな妄想を振り払うべく、あたしは愛車ヤマハ・ビラーノのエンジンを始動させる。一、二回ぶかしすると、うおおおんと良い音をさせて、マフラーから真っ黒い煙が吐き出された。バックミラーが少し曲がっていたので調整したとき、鏡越しに一瞬だけ彼女と目が合つた。ほんの一瞬の、時計の秒針が、かちつかちつと一回動くくらいのあいだ、あたしたちは見つめ合つた。そして不意に彼女は、いたずらを見つかった子どもみたいに目を逸

らし、あわててヘルメットをかぶつた。

あたしも、少しだけドキドキした。

排気ガスのにおいが、白っぽい微風に巻き上げられてゆく。どこか後ろのほうで、置き去りにされたコーラの空き缶がじろじろ転がる音がした。エンジンの回転数を上げ、クラッチをつなぐ。田の前の景色が、ゆっくりと後方へ流れだす。そのまま畠下がりの怠惰な空気を切り裂いて、バイクは轟音とともにスピードを上げた。

彼女が住んでいるというアパートは、二人が出会った駅から徒歩で十分ほどのところにあった。バイクだと、あつといつ間の距離だ。敷金礼金要らずのワンルームマンション。どう見たって、ここで家族と暮らしているとは思えない。タイル貼りの壁から、英語でリバーサイド・シティハウスと銘打った看板が突き出している。リバーサイドねえ……。一応あたりを見回してみたけど、川らしきものなんてどこにもない。

「ここで一人で暮らしているの？」

「一グルを外し、等間隔にならぶ四角い窓を見上げながら訊ねた。

「……いや」

彼女は、鬱陶しそうにヘルメットを脱ぐと、うなじを隠すていどのショートヘアをふるんふると振った。ひかえめに茶色く染めた髪が、太陽光線に透けて金色に輝いている。

「姉貴と二人で暮らしてる」

「あ、お姉さんいるんだー」

彼女に良く似た美人の「」を想像して、思わずため息がもれた。いいな、お姉さんと二人暮らしなんて。

「ちょっと休んでくか？」

不意に彼女がそう訊いてきたので、びっくりして首を横に振つてしまつた。

あたしつて、バカ。

心の中は、もう彼女に対する好奇心でいっぱいなのに、このまま

別れたくないのに、せっかく彼女のほうから声をかけてくれたのに……。とつさに意思とは正反対の行動をとつてしまつ。あたしの悪いクセだ。だけど今なら「やつぱり寄つてくれ」なんて言えない。お腹を押されて、うずくまつてやるうかな。「あいたたた、とつぜん持病の癪が！」とかなんとか言つて……。

「なあ、名前教えてくれよ。街で逢つたとき、なんて声かけていいか分かんねえし」

「え、あ、うん……。あたし、ゆみ子」

「そつか」

「え、それだけ？ それで終わり？ 君にぴったりの可愛い名前だね、とか、ゆみ子つてどんな字書くの？ とか、もつと他にもリアクションあるでしょ。」

「俺、ヨウスケってんだ」

「あ、ずるーい。ちゃんと自分の名前教えてよー」

「……だからヨウスケだつて」

「何とぼけたこと言つてんのよ、ヨウスケなんて男の名前じやん。それともあれ？ あまりにも言葉づかい乱暴だから、男みたいなんだ名付けられたとか？」

「いや違つて。あだ名じやなくて、本名がヨウスケなの」

「ウソばっか……」

「ここでまた、さつきと同じ疑問が頭に浮かんだ。もしかして、思いつきり一ゴーハーフとか？」

「あなた……って、ひょつとじつ男性？」

「だとしたら、どうする？」

「……べ、べつに、どうもしないけど」

とか言つながら、半歩ほど後じれる。

でも、どう見たつて女の子の体なんだよな。乳だつて羨ましいくらいに大つきいし、腰なんて悔しいくらいにくびれてるし、顔も憎らしいくらいに可愛いし。あと骨格もほつやりして華奢だし、喉ぼとけだつてない……。

「どう からどう見ても、どう ありの美少女 」

「うむむ……」

考えてみても分からることは、実力行使、当たつて砕けるの精神で強引に調べるのが、あたしの流儀。

「えいひ

むぎゅ。

右手をのばし、Tシャツの上から思いつき乳をわじづかみにしてやつた。彼女が驚いて身を固くする

「お、おい、いきなり何しやがる」

「いや、この乳、本物かなーって思つて」

「本物にきまつてゐるだろ、百パー セント純生おっぱいだ」

「でも最近の医療用シリコンは、なかなか区別つかないくらい柔らかくて弾力があるつてゆーから……」

「ひとを、まがい物みたいに言つな」

ただつかんだだけじゃ 本当の質感がよく分からぬので、ちょっと揉んでみた。

わしわし。

「うーん、微妙な感じね……。手触りは本物っぽいけど、でも形が整いすぎつてゆーか、寄せて上げて感がないつてゆーか……。つか、これEカップくらいあるでしょ？」

「お、おいつ、調子にのつてあんまり揉むんじゃねえ。なんか気分出てきちゃうじゃねえか」

「え、感じてるの?」

「ばかやうひ。このあま、いい加減にしねえと……」

「うしてやるー」と言つて、今度は彼女があたしの首に腕を巻きつけ、もう片方の手で乳をつかんできた。

「さやあー、何すんのよ、この変態」

「うるせー。やられたら、やり返す」

「ちょっとやめてよ、痛いじゃないのよ」

「えーい、じたばた騒ぐな。このボリューム感に欠ける揉みごたえ

はCカップとDカップのあいだつてところだな。しかも脇の下の肉まで総動員してる」

「つるわー、うるさい！」

逃れようと懸命にもがくのだが、華奢な体にしてはやけに力が強くて、なかなか身をはなすことが出来ない。

「わはは、ヨウスケ様ごめんなさい、つてゆつたら許してやるぞ」「ばか、だれが謝るもんか。つてゆーか、このままあんたの傲慢無礼な乳揉みたおして、大根のべつたら漬けみたいに萎れさせてやる」「おー、やつてみる。俺様のおっぱいは永遠に不滅だ」

一人、もつれ合いながらお互いの乳を揉みあつていると、部活の帰りだらうか、ジャージ姿の中学生が三人、あたしたちのことを遠巻きにしながら何とかひそひそさやき合つてるのが見えた。気がつくとアパートの一階の窓からも、誰かが首を突き出して興味深げにこちらを見下ろしている。急に恥ずかしくなつて、あたしたちはあわてて身をはなした。

「あぶねーあぶねー。すっかりおめーのペースにはめられちまつたぜ。なんて、くれいじーなヤツなんだ……」

「あぶないあぶない。そっちこそ、見た目可愛いと思つて油断してたら、危険きわまりない要注意人物だわ……」

ちょっと顔を赤くして、しばらくのあいだ互いに睨み合つていると、突然、彼女の細い肩が小刻みに震えだした。くつくつと、ひきつけを起こしたようにとじた口から乱れた息が漏れ出している。こみ上げてくる笑いの衝動を、懸命にこらえているのだ。あたしもつられて、思わずぶーっと吹き出してしまつた。それが合図となり、二人は堰を切つたように腹を抱えて大爆笑した。

「はははは、は、腹が、腹が痛てーつ。おまえって最高に変なヤツだよ」

「ひーつ、やめてー。苦しくて息ができないよー」

あたしたち女子は、何でもないことで日々よく笑う。

誰かさんの失敗談、間の抜けた噂話、テレビで仕入れた一発ギャ

グ……。

後で考えると何でもない」とだが、もつ可笑しくってたまらない。十七才の、今のあたしたちにしか分からない、笑いのつぼ。始動させるスイッチはいたるところに存在し、そしていつも誰かが不用意にそのスイッチを押してしまう。

女の子の体は、つねに笑いたがっているのだ。

ましてや、今日みたいに空が底抜けに青い日曜日なら、なおさら……。

ミウスケと名乗るその美少女とあたしは、夏の陽射しが降りそそぐ古びたアパートの前で、もう死ぬかと思うほど笑い続けた。ギャラリーたちはあきれ、とつくに姿を消していく。

つづく……。

ナニカの運載ちょっと卑くないかな? いや、まあ先生の

なんかの運載ちょっと卑くないかな? いや、まあ先生の
んね~ (トトト)

せぬまじこ（繪畫美）

更新、遅くなつたからみんなやつ……。

りりん 。

自宅の部屋の窓に吊るしてある、風鈴がゆれた。
網戸から流れこむ生ぬるい微風に短冊がひらひら踊るたび、心地
よい涼やかな音色が部屋の空気をなごませる。

りりん、りん 。

闇夜に鼻を利かせ、風のにおいをさぐつてみる。
むつとするような湿つた土の香りに混じつて、れぞれめくような虫
のこえが聞こえてくる。かすかに火薬のにおいもある。きっと近所
の公園で、子どもたちが花火遊びをしているせいだろう。さあつと
風の勢いが強まる、そのときだけどこかの家の茶の間から、野球
中継の音声がどぎれどぎれに聞こえてきた……。

心静かに夜風のにおいを感じとり、運ばれてくる音色にじつと耳
を傾けていると、ほんのり桜色に染まつた湯上がりの肌から少しづ
つ汗がひいてゆく。

あとは、冷えたスイカでもあれば完璧。

頭と体にバスタオルを巻きつけただけのあられもない姿で、あた
しは膝や、かかとや、くるぶしのあたりにマッサージオイルをすり
込んでいた。きれいな脚線美を維持するためには、日頃のケアがと
つても大事。オリーブオイルがじんわり染み込んでゆくにつれ、昼
間バイクを乗り回して疲弊した肌が徐々に回復してゆく。もう最高
に気持ちの良いひととき??。

けど、頭の中ではぜんぜん違つことを考へたりする。先ほどか
らあたしは、自分の携帯電話にせわしなく視線を走らせては、何度も
何度もため息をついていた。

……かけてくるかなあ。

今日、別れぎわに、あのヨウスケと名乗る不思議な美少女と、互
いの携帯番号を交換しあつた。ほんとうに、いかにも話のついでみ

たいに「そのうち気が向いたら電話するから」って感じで聞き出した。そして「じゃあね」と手をふつて別れた。もちろん、また会う約束なんていらない。元々なんの接点もない、赤の他人の二人。

。交換した電話番号だけが、今のあたしたちをつないでいる。

りりん 。

また風鈴がゆれた。

テディーベアのヌイグルミが、少しふてくされた風にそっぽを向いている。その顔に、あの女の子の風貌を重ね合わせてみると、人生思いつきり斜に構えます、みたいなふてぶてしさが妙に似通つていて、くすつと笑いがもれた。

ほんと、面白い子だった。初めて出会うタイプの女の子。うちのがつこにも面白い子いっぱいいるけど、彼女みたいに、ただ一緒にいるだけでわくわくしちゃう謎めいた魅力にあふれた子つてのは、なかなかお目にかかれない。あの子きっと、なにか秘密を隠してる。あたしなんかの思いもつかないような凄い秘密 。

それが知りたい。いや、彼女の何もかもを知つて、あ、そういうことだつたんだー、つて納得したい……。

バイクに乗るとき、ぎゅっとしがみついてきた細い腕の感触が、べつたり張り付いてきた胸の隆起が、やわらかな頬のぬくもりが、まだあたしの腰や背中にしつかり刻み込まれている。

また会いたいな。会つてまた二人でふざけ合つたり、バカ騒ぎしたい……。

あたしは、勉強机のはしつこに置かれたピンク色の携帯電話へ、もう一度目をやつた。

……かけてこないかなあ。

自分の、それほど豊富ではない人生経験から言わせてもらえば、番号を教えたその日のうちに電話がかかってくればピンゴー！ 相手はかなり自分に好意をよせているとみてよい。逆に今日電話がこなければ、そのまま永久に赤の他人として忘れ去られる可能性大。いざとなれば、こちらから電話してみてもいいけど、でも出来ること

なら彼女のほうからかけてきて欲しい。

……ちくしょう、かけてこいよなー。

そのとき、不意に夜空が震えた。

どーんっ、どどんっ。

どこかで景気よく花火が打ち上がったようだ。破裂音が低く轟くと、夜空をみたす弛緩した闇がぐらりと揺らぎ、入れ替わるようにな虫のこえが静まった。いいね、花火の音つて。せっかく巡ってきた夏という季節を日一杯楽しまなきや、つて気にさせてくれるよ。可愛い浴衣着て、赤い鼻緒の下駄をからこり鳴らして、外を練り歩きたくなる。素敵な誰かと手をつなぎながら……。

妙な空想にひたつてしまい、あたしは急にひりひりと喉の渴きをおぼえた。オイルの瓶を置いて、ゆっくりと立ち上がる。スイカは冷えてないけれど、お中元でいただいたカルピスなら冷蔵庫にお行儀良く並んでいるはずだ。

手についたオイルをバスタオルで拭つて部屋を出ようとしたとき、突然、携帯電話が鳴った。おおげさな話じやなくて、あたしはぴょんと飛び上がった。

やつたー、きた、きた！

慌てて勉強机に駆けもどる。胸に手を当て、大きくひとつ深呼吸する。そしてヨウスケと名乗るあの女の子の、可愛い顔には似合わないハスキーボイスを素早く想像してみた。

「あ、ゆみ子か？ 僕、昼間バイクに乗せてもらつたヨウスケ。もちろん、おぼえてるよな？」
「たぶん、こんな感じ。

よし。

うん、と咳払いをして、ゆつくり受話器を耳に押し当てる。

「……はい、ゆみ子です」

ちょっと氣取つた声が出てしまつた。

「あ、ゆみ子。今日は途中でいなくなつちゃつて、『めんねー

「……なんだ、沙織じょん

電話の相手は、田ウスケではなく親友の沙織だった。急にへなへなと膝から力が抜けてゆき、あたしはそのまま勉強机のイスにどさりと座り込んだ。

「なーんだ」

「なーんだとは『挨拶ねー、あれれ、やつぱ』機嫌ななめとか?」「べつに『ー、そんなことないけど』

「ふーん……。あつ、じゃあ、もしかして

沙織の声がはずんだ。

「だれか良い人からの電話を待つてたとかー?」

「ち、ちがうもん。そんなんじゃないもん」

『うううううう、そんなに動搖してどうする。それじゃ「はー、その通りです」って答えてるよひつなものじゃん。

「あれ、図星だつた?」

「ちがうってばあ。もう、へんな勘ぐりしないでよね

『めんめん。でもさあ、あんたの言つてた、なんだっけ? 身を焦がすような運命的な出会いだっけ? そつこうの、あたしもちよつとだけ憧れちゃうんだ……』

「なーに言つてんの、あんたにはケンジがいるじゃん

「ケンジねえ……」

そのとき、受話器の向こうから、そのケンジの間の抜けたような声が割り込んできた。

「なになに? 僕のうわさ? つてか、おまえ今だれと話してんの?」

「え、え? 沙織、今ケンジと一緒になの? なんで、こんな時間に? つて、まさか……ラブホから電話かけてるとかーつ。

固唾をのんで耳をそばだてていると、受話器の向こうから沙織とケンジがなにやら言い争いをしながらも、思いつきついこちやついている様子が伝わってきた。「その電話こいつよこせー」とか「だめえ」とか、妙に嬉しそうな悲鳴が聞こえてくる。途中、「ケンジのえつちー」とか、けしからんセリフも聞こえてきて、あたしはだ

んだん腹が立つてきた。なんだかんだ言つたつて、あんたら思いつ
きりラブラブじゃん！ つてゆーか、それ見せつけるためにわざわ
ざ電話してきたわけ？ この、おたんこなす娘がー。

「……ね、ねえ、もしもし、沙織？ 用がないんなら電話切るよ。

「人の愛のはぐくみを邪魔しちゃ悪いし」

すると、電話機の奪い合いに勝利したらしい沙織が、早口で言つ
た。

「あ、ごめんごめん。それでね、ゆみ子。じつはあんたに紹介した
い子がいるんだけど」

「え？」

思いもよらぬ展開に、ちょっとドキッとする。

「ケンジの中学時代の友だちでさ、大高でサッカー部のキャプテン
やつてるスポーツマンなんだ」

「……大高つていつたら、秀才ばつか集まるちょー進学校じゃん」

「そうそう。おまけに、めっちゃイケメンで、身長はかるく百八十
センチオーバー」

「……」

「あと、親がお医者さんで、本人も医大に入るため家庭教師三人つ
けて猛勉強中なんだつて。ね、まさにサラブレッドでしょ？」

「なんだか悪徳商法のセールストークみたいに良いことづくめの話
だ。」

「……そんな凄い子が、どうしてケンジなんかに彼女の斡旋依頼し
てくるわけ？」

「さあねえ、スポーツマンつて意外とウブなんじゃない？ で、な
かなか女の子のことを上手に口説けないとか

「なあらほど」

「会つてみなよ。今度の日曜日。あたしとケンジでしつかりお膳立
てするから」

「ふふ、と含み笑いしながら沙織が言つた。いきなり降つて湧い
たような話だけど、でもスポーツに打ち込む男子のひたむきな姿つ

て、嫌いじゃない。ケンジの紹介つてゆーのが、ちょっとしゃべるわるけど……。

「…………まあ、会つてお話するくらいならいいかもしないけど」「お、やる気まんまんじゃん。上手くいけば、新しいローター買つ必要なくなるしね」

「つむせー」

一人して、さやははと笑つた。風鈴が、りーんと泣いた。一瞬、

ツウスケの笑顔が浮かんで、なぜだか胸があきつと痛んだ……。

そういうえば、中学のとき付き合ってた彼も、サッカーやつてたつ
け……。

口べたで、音痴で、勉強が嫌いで、納豆が食べなくなつて、容
姿は平均点以下……。ほんと、なんの取り柄もないヤツだったけど、
でもサッカーボール追いかけてるときだけは、なんていうかキラキ
ラ輝いて見えた。「俺、リフティングの自己最高記録、七十九回な
んだぜ」って自慢しておいて、「もし百回連續に成功したら キ
スしてくれる?」だつて。ふだん口べたなくせに、やけにさらりと
言つてのけやがつて。……けつきょく、それがあたしのファースト
キスだつたりする。

卒業と同時に別れちゃつて、がつこもわりと離れてて、あれから
一度も会つてないけれど今、どうしてるかなあ。ちゃんと新しい
彼女つくつて、しつかり青春してるんだろうか。

沙織たちが紹介してくれるという男子が大高サッカー部のキャプ
テンだと聞いて、あたしは中ぼうのときの、あの恋人という存在が
いつも近くに寄り添つてくれていた、そんな懐かしい日々のことを
思い出していた。

一人ともお金なかつたし、あまり遠くへは遊びに行けなかつたけ
ど、でもお洒落して近所の商店街ぶらついてるだけで楽しかつた。
一日、一日が一人のイベントを中心に動いてて、次の日曜日はどこ
へ行こう、今度の夏休みは何回海に行けるかな、来月の彼の誕生日
には何をプレゼントしてあげよつ……なんて考へてるうちに、あつ
という間に時間が経つてしまつた。毎日が充実していて、なんかこう、
つねに全身にパワーがみなぎつてる感じがしてた。ケンカしたとき
とか、けつこう落ち込んだりもしたけど、でも仲直りするたびによ
りいつも彼のことが好きになつて、もう一人はずつとこのまま一
緒に、喜んだり悩んだりキスしたりしながら大人になつてゆくんだ

うつむ、つて思つてた。今思ひ出せば、あの「じゅが」一番楽しかった気がする。

やつぱ、女の子は恋してなきやダメだ。

鼻歌をうたいながらキッチンでカルピスをつくつてこると、しゃこしゃこと歯をみがきながらパパが近寄つてきた。

「じゅ、ゆみ子、カルピスはもつと薄めて作りなさい。糖分の取り過ぎは体によくないぞ」

「いいじゅん、いま猛烈に甘いものが飲みたい気分なのよ」

つてゆーか、甘い夢を見ていたいの。

あたしがふんと鼻息を荒げると、パパはすしすしと引き返し、洗面台でがらがらペーつとうがいを始めた。

いい歳して、いまだにママにござつこんで、あたしの誕生日はすぐ忘れるくせに、結婚記念日には毎年欠かさず豪華なバラの花束を抱えて帰つてくる。そんなちょっと憎い人だけど、食品会社の開発部門につけさせて、いつも食通を自負してただけあつて料理を作るのがとつても上手。あたしは子どものころからママの作るご飯より、日曜の晩にだけ作つてくれるパパの手料理のほうがだんぜん好きだつた。盛り付けがちょっと気取つてて、思いつきり気合を込めて作つてて、すごく美味しい。たまに外食すると店の料理口にしながら、あーでもない、こーでもないつてウンチクたれるのが少しウザイけど、でもあたしのつくる料理の味つて、たぶんパパの味……。将来お嫁に行つたとき、旦那さまから「君のつくる料理は美味しいね」つて褒められたら、それはきっとパパのおかげだ。

その彼が、タオルで顔をがしがし拭きながら再び近づいてきた。

「ゆみ子ー、パパのこと尊敬してるかー？」

はあ？ この人は、突然なにを言い出すのやつ……。

グラスの氷をかちやかちやかき回しながら「べつにー」と少しうくされて見せると、「そつか、尊敬してないのか」と言つて右手を小さく振つてみせた。その指先には、なんと一万円札が……。

「パパ大好きー、あたしの血縁のお父さん、将来はぜつたいパパみたいな素敵な人と結婚するー」

「よしよし」

なにが、よしよし、なのかよく分からぬが、彼はたまにこうやって臨時のお小遣いをくれる。友だちに聞くと、わりとどこの家庭でも同じらしく、元来父親というものは、娘にお小遣いをあげることを秘かな楽しみにしているらしい。

とにかく大事なデータを前に、金銭的なピンチは切り抜けられた。

「パパ、さんきゅー」

右手にカルピスのグラス、左手に真新しい一万円札をひらひらさせながら階段を駆け上つてゆくと、下からちょっと照れた感じのパパの声が追いかけてきた。

「あんまり変なもん買うんじゃないぞー」

あーー、ママのやつ、パパにしゃべつたなー！

少し憤慨しながら部屋に戻つてみると、携帯電話のLEDが点滅していた。どうやらあたしが留守にしているあいだ誰かが電話してきたらしい。すぐに履歴をチェックすると、リストの一番上に、ヨウスケの名前があった。

やつた、かけてきた！

あわてて表示された番号へそのままリダイヤルする。すぐにスピーカーの向こうから、ちょっと困惑した感じの女の人の声が応じた。

「……はい。卯月ですけど」

あれ？ ヨウスケの声と違う。ひょっとして電話番号間違えたかな？ いやいや、かかってきた番号に直接ホールしてくるから、そんなはずないし……。

「ヨウスケ……じゃない、ですよね？」

当惑しながら訊ねると、少しの間をおいて電話口の向こうから、なにやら安堵するようなため息が聞こえた。

「……ああ、ヨウスケのお友だちだったのね？ ごめんなさい、電話帳のリストに見知らぬ番号が登録されていたものだから、だれだ

るつと思つて一応確認してみたの。夜遅くに、ほんと「めんなさいね」

あつ、じゃあこの人がヨウスケのお姉さん。あいつ自分の番号じやなくてお姉さんの電話番号あたしに教えたんだ。ひどいやつ……。「あ、はじめました。つてゆーか、じつういや、「めんなさい。あたし、てつきの番号がヨウスケの携帯電話のものだとばかり思つて……」

「ううん、いいのよ。一人で同じ電話機を使つてるんだもの」「へー、今どきめずらしく、そういう格安料金プランがあるのかな? やりっとセコい気もするけど……。」

「こま、ヨウスケに代わるわね」

「あ……」

今日はもう遅いから明日の朝またかけ直します、って言おうとしたのにー。でも声が聞きたいのも、これまた事実。少しわくわくしながら待つていると、わずかな間を置いて、あのハスキーボイスが電話口から聞こえてきた。

「あ、俺だよ、おれおれ」

なにが、おれおれ、よ。振り込め詐欺かつつい。

「今日は、お前のおかげでマジ助かつたよ。さんきゅーな」

「さつそく電話してくるなんて、可愛いとこあんじやん。さては、あたしに氣があるなあ?」

「まあ、ないつて言えば嘘になるけどね」

「え、まじで?」

「といひでよ、俺ちよつと臨時収入があつたんだ。で、お前になにかお礼がしたくてさ……。今週の日曜日いつにてるか?」

「「めん、今度の日曜は……ちよつと」

さすがにデートだなんて言えない。せつかくヨウスケのほうから誘つてくれたのに、なんてタイミングの悪いこと……。

「やうか……残念だな。俺、お前に最高に美味しいラーメン食わしてやうと思つてたのに」

「このくせ暑いのにラーメンは、……ちょっと遠慮したいです。でも残念そうなヨウスケの声聞いてると、なんだか切なくなつた。

「あ、でも、午前中少しくらいなら会えるかも」

「いこよ、別に無理しなくても」

「ううん、会いましょう。じゃないと、なんかこのまま一生会えないなりそうな気がして……」

「ははは。女の子って、突然おセンチな」と言に出すから困るんだよな」

なに言つてんの、自分だって女のくせに。

「じゃあ駅前に十時つてのはどうだ? ラーメンは無理かもしんねーけど、自販機の缶コーヒーくらいならおうりつてやるよ」

「せこ? ?。せめてスタバくらい連れてつてよね」

「分かった。じゃあスタバのチョコレートマフィンで手を打つてくれ」

「おつづけー」

じゃあ日曜の十時な、つて言つて突然電話は切れた。なんて、せつかちなヤツ……。でもおかげで日曜日の楽しみが一倍に増えた。ちょっと一股かけるみたいで心苦しいけど、でもかたや初対面でまだ付き合つかどうか決めてないし、かたや女の子だし、まあいかつて感じ。

ああ、なんか今夜はわくわくして眠れそうもないなあ、つて思つてたけど、冷たいカルピスのどに流し込んで、部屋の明かりを消したら、そつこーで意識が夢の世界へと飛んだ。ものすごく寝付きがいいのも、あたしの取り柄だつたり……。

つづく……。

ほっぷ、すてっぷ、じゃんふで、はずみをつけて水たまりを飛び越えると、制服のスカートが風をはらんでふわっとひるがえった。一瞬だけ水面がきらつと輝く。今朝はなんだか調子がいい。心も体もやけにはずんでいる。パワーがみなぎっている。もうゼンマイを目一杯巻いたチョロQみたいに、五体がエネルギーのはけ口をもとめて張りつめている。

ああ、久しく忘れていたこの感覚……。心のなかに誰かが住みついている。誰だらう？ ひょっとして三ウスケ？ つて、まさかね。たぶん今度の日曜日に出会うはずの、沙織たちが紹介してくれるというサッカー青年に違いない。まだ見ぬ人だけれど、でもサッカーやってるってことで、中学のとき付き合つてた恋人とイメージが重なつてしまつた。同時に、恋愛しながら過ごしてきたあの切なくて甘つたるいような日々のことが胸によみがえり、過去の思い出と未来への期待が「じちゃまぜ」になつて、勝手に新しい恋人のイメージを作り上げてしまつたのかもしれない。

とにかく予感だけはするのだ。

なにか、とてつもなく素敵な恋がはじまるような、そんな予感が

最近覚えたてのラブソングをふんふんハミングしながら、早朝の横断歩道を渡つていると、不意に背後から声をかけられた。

「よし、今日はいつも増して、じつ機嫌みたいじゃーん。なにか良いことでもあつたのかなあ？」

ふり向くと、沙織が腰に手を当てて、にやにやしていた。

あの顔つてぜつたい、あたしをおちよへりつとしているときの顔。

あたしは、すっとぼけた表情で小首をかしげて見せた。

「何のことね？」

すると、あんのじょ、う。

「危険な恋の予感に、わくわく、ドキドキ、つてかあ？」

なーんて言つてきた。

まつたくもつ、この子つてばいつもいつなんだから。でも、だいじょうぶ、ほんとに楽しい気分のときつて心にもゆとりがあるから、少しくらいからかわれたつて、へつちやら平氣。あたしは余裕しゃくしゃくの表情で、あつかんべーしてやつた。

「びーつ」

「あれま」

あたしが思ひどおりの反応をしめさないものだから、沙織はちょっと拍子抜けした顔をして、それからすねた目で空を見上げた。

「なーんだ、つまんねーの」

それは悪うござんしたね。

未明に少し雨が降つたせいで、風が薫つてゐる。なんていうか、洗い立てのシーツみたいな香り。吸い込むと、鼻の奥に心地よい刺激がつんと突き上げてくる。そんな爽やかな風を頬にうけて、あたしは沙織と肩をならべ通学路を歩きだした。水たまりに映りこんだ雲の動きがやけに緩慢で、その青い空のなかをアメンボが気持ちよさそうに滑空してゐる。あたしは、もう一度水たまりを飛び越えようと身構えて、沙織に腕をつかまれた。

「ちょっと止めなさいよ、子どもじやあるまいし」

「いいじやん、ジョイナーやらせてよ」

「だめだめ。もしあんたがヘマをして水たまりの上に着地したら、あたしまで水かぶるんだからね」

沙織は、丸襟の真っ白いワンピースを着ていた。もちろん、あたしだつて同じかつこう。襟元と袖口のところにマリンブルーのラインが入つていて、左胸には高校のエンブレムが刺繡されている。つまりはこれが、うちのがつこの夏服というわけ。どこにでもあるような私立の女子校なのに、どうこうわけか制服がとってもお洒落。べつにお嬢様学校と呼ばれるよつたところではないし、大学進学率

も中くらい、スポーツもとくに強いというわけじゃなく、ほんとなんの特徴もない私大の付属高校なんだけど、なぜか制服のデザインにはこだわりがあるみたいで、県内でも珍しい純白のワンピースを採用している。……でも、こういうのってなんか良い。あまり欲張らず、なにか一つだけ、たつた一つだけでいいから、他の学校にはないような輝ける部分を持つている。あたしも沙織も、この制服に憧れてうちの学校を選んだ。ちなみに襟と袖口にあるワンポイントのラインは、入学年度によつて、赤、青、緑と色が分かれている。その色を見分けることによつて何年生なのか判るようになつていて、今年の新入生は緑、そして先輩たちは赤といつたぐあいに。

学校が近づくにつれ、同じ制服を着た女の子たちの数がしだいに膨らんでゆく。夏の初めの月曜日、楽しさと氣怠さが同居するなか、大人と子どもの境目を生きる彼女たちの顔に、底抜けの明るさはない。みな、笑顔の裏に何かしら悩みをかくしている。はやく大人になりたくて思いつきり背伸びしてゐるくせに、その一方で大人社会に対しても意地で感傷主義的な反感も抱いている。ゆらゆら揺れ動くあたしたちの精神は、いつだつてすつごく不安定。

そんなことを考えながら、校門に吸い込まれてゆく生徒たちの姿をぼんやり眺めていると、一人の女の子の顔があたしの目に飛び込んできた。

「えつ」

あれつて、もしかしてヨウスケ。

うつそーつ！

一瞬、自分の目を疑つた。

でも間違いない、あのオリエンタルで、コケティッシュで、ミスティリアスで、存在感抜群の美少女つて、ヨウスケの他にはいない。

校門の内へと流れ込んでゆく生徒たちの一団に見え隠れしながら、彼女はゆつくりと歩いていた。周りの友人たちと楽しそうにお喋りしている。ときおり真っ白い八重歯を覗かせて、ころころと気持ち良さそうに笑つている。お洒落にカットされたショートヘアが、校

舎の屋根をかすめる朝日にぼんやり透けて輝いている。制服のワンピースなんか着ているせいで昨日とは少し雰囲気違つて見えるけど、掃きだめに鶴つてゆーか、イモくさい高校生の中にあって、一人だけアイドル歌手のように眩いオーラを放つていて。あんな目立つやつつて他にいない。ぜつたいに見間違えるわけがない。

驚いた 彼女が、同じがつこの生徒だつたなんて。しかも赤いラインの入つた制服着てるつてことは、あたしの先輩？ まじつか？ 信じらんないよ、あのやんちゃで子どもっぽい言動から察するに、てつくり年下だと思つてたのにーー。

「……ちょっと、ゆみ子？ どうしたの？」

急に立ち止まつたあたしに驚いて、沙織が横から顔をのぞき込んだ。

「なんか忘れ物でもした？」

はつと我に返り、ゆっくりと首を振る。

「え、いや……、違うよ」

「じゃあなによ。??あつ、分かつた、新しい恋愛を始める前に、もう一度自分といつ人間を根本から見つめなおしてみる気になつたのね」

「んなわけないでしょ」

言いながら、あたしは走り出していた。

「ごめん、あたしちよつと先行くね」

「あれれ、なによ、トイレなら付き合つしき」

「違うつてば」

「ちよつと待つてよー、親友を置き去りにする氣ー？ かむばーつ

く、まいふれーんど」

追いすがるうとする沙織に、

「まじ、ごめん」

と誤つておいて、あたしはユウスケがいたあたりへダッシュした。なによあの子つてば、妙に意味深な態度とつてたくせに、女子校通つてるつてことは思いつきり女の子じやんー。もうこうなつたら、

ぜつたい本名聞き出しちゃる。

そのとき不意に、背後からぐつと腕をつかまれた。

「ちょっと沙織やめてよ、今だいじな用があるんだからあ」

少し怒った顔で振り返ると、沙織のかわりに、グレーのスースを着たひょろりと背の高い中年女性が立っていた。白髪染めの行き届いた黒髪をアップにして、細い縁なし眼鏡をかけている。あごの尖った逆三角形の顔が、昆虫界の残忍なハンター、カマキリを連想させる。彼女こそは現代国語の教諭にして我が校の生活指導担当、オールドヒスティーの大山教諭であらせられる。うちのがっこで教鞭を振るう先生たちの中で、あたしがもつとも苦手とするおばさんなのだ。

「お、大山せんせ、おはようござりますわ。あたしに何か用ですかあ？ 今ちょっと急いでるんですけど、一時限目の予習とかしなくちゃいけないし」

「ウソおっしゃい！」

「ほんとですか、まじ急いでるんですけど、お願い、行かせて」

なんとか彼女の手をすり抜けて再び走りだそうとするが、今度はぎゅっと耳を掴まれた。

「痛でででででで、痛ででで

「待ちなさいって言つてるでしょ」

「せんせ、ひどいですわ、年頃の娘の顔になんてことするんですかあ、耳が広がつてダンボみたいな面相になつたら、もうお嫁に行けなくなるじゃないですかあ」

あたしが涙目になつて抗議すると、大山教諭は、きつついバラ系の香水の匂いをふんふんさせながら、ふんと息巻いた。

「あなたは普段から授業もちゃんと聞いていないのだから、少しくらい耳が広がつていたほうが具合が良いのよ」

「せんせ、そんな言い方つてあんまりですわ」

「そんなことよつ……」

「こちらの抗議には耳を貸さず、彼女は陰険なカマキリ顔をぐぐつ

と近づけてきた。あたしは、思わずびくつと肩をすくめる。

「あなた、昨日のお昼ごろ、駅前の通りでオートバイを走らせていましたわね？」

「き、き、昨日ですかあ？ 昨日はたしか朝から両親と祖父のお墓参りに行つてたよくな……」

「何言つてるの、あなたのお爺ちゃん、まだお元気でしょ……」

「しまつた、祖母と言えばよかつた……」

「あなた、ヘルメットかぶらないままオートバイに一人乗りしていたわよね？」

「うわあ……、最悪だあ。返答に窮してあたしが目を泳がせていると、背後から沙織が追い抜いていった。

「あたし先行くねー」

「ちょっと待つてよー、親友を置き去りにする氣ー？ かむばーっく、まいふれーんど」

「じさくさにまぎれて沙織のあとを追おうとしたけど無駄だった。獲物を捕らえたカマキリのじく、大山教諭の骨張った指はあたしの腕にしつかり食い込んでいる。

「いいですか、そもそも我が校は生徒たちの自由な気風を尊重するがために運転免許の取得にも寛容なのです。けれどもそれは、交通法規を遵守するという大前提のもとに我が校の生徒として恥ずかしくない社会秩序を……」

「哀れ??、朝から、なーんか良いことあるんじゃないかなーなんて気がしてたけど実はそうでもなかつた不運な女の子は、それから一時限目の予鈴が鳴るまで、延々と生活指導先生のねちっこい説教を聞かされるのであつた。

もちろん、ヨウスケの姿はとっくに校舎のなかへと消えている。

つづく……。

「ハセー！」（後書き）

更新遅くてまじ「みんなさーい。反省します。せめて週一更新できるよう努力したいと思います。」こゆみ先生も『電車通学』の連載がんばってー！

「むかし、たむらのみかどと申すみかどおわしましけり。そのときの女御たかきこと申すみまそかりけり。それうせたまいて……」

一時限目の授業は、古典だ。

正直、あしたたちの将来において、これってなにかの役に立つの？ みたいな退屈度ナンバーワンの教科。せっかくの爽やかな朝の目覚めがもう台無しつて感じで、とにかく眠いことこの上ない。教室内を見渡しても、イスに座ったままこいつこいつくり船を漕いでる子や、なかにはネムリヒメの美樹みたいに、堂々と机に突つ伏して爆睡してる強者までいる。かるうじて起きてる子だつて教科書のかげにかくれてマーキュア塗つてたり、コミック読んでたり、ぼんやり窓の外を眺めながら物思いに耽つっていたり。もう在原業平なんて、ぜんつぜんお呼びじゃないつて感じの気の抜けた授業風景。かく言つあたしだつて、上の空で考え」とをしてたりする。コウスケのこと。

同じがつこの生徒だつたなんて思いもよらなかつた。あんな不思議オーラを放つ美少女が、同じ校舎のなかで、同じ制服着て、一緒に学校生活を送つていただなんて、今まで氣づきもしなかつた。まあ学年が違うつてのもあるんだろうなど……。でも昨日知り合つたばかりの子と再びがつこの前でめぐり会えるなんて、ほんと世の中つてせまい。十七才にしてそんな達観するようなことを言つのやだけど、まじでそう思つた。

「……そこばくのささげもの木のえだにつけて、堂のまえにたてたれば、山もせらりと堂のまえにしげしげでたるよになむ見えける」古典担当の金田一先生が、眠気にさらりと拍車をかけるような心地よいバリトンボイスで、伊勢物語の一節を読み上げている。横溝正史の小説に出てくる同姓の探偵よろしく、鳥の巣みたいなヘアスタイルをした三十代なかばの男性教諭だ。授業に熱が入るとそのぼさ

ぼさ頭をかきむしるクセがあるので最前列の子なんかはちょっと警戒してるけど、意外にも毎日きちんと洗髪してるらしくて映画みたいにフケが飛び散るということはない。ただ見た目がなんて言うか、とっても貧相。顔は栄養失調おこしたナマズみたいだし、いつも眠たそうに目をしょぼつかせている。うちのがつこの男性教諭つて、どうしてこうルックスのイケてないヤツばかりなんだろ。やっぱ生徒と色恋沙汰なんか起こされちゃ困るので、わざと外見しょぼい人ばかりを採用してるのだろうか……。

「あー、ここんとこ試験に出るからな、ようく聞いておくよう。」「えー、右大将に、いまそかりける、藤原の、常行ともうす、いまそかりて……」

その冴えない金田一先生があたしたちに背を向けて、かつかつと黒板にチョークを走らせはじめた。少し右上がりの、ちまちました神経質そうな文字がならぶ。あーあ、だるくてノートなんか取る気になれないや……。あつそりだ、携帯で黒板をまるごと[写真に撮つてしまおう。そうすればノートへ書き[写さず]に済むしね。うん、あたしつつて天才。

そう思いついて制服のポケットから電話機を取り出したとき、手のひらのなかで発光ダイオードが点滅した。

およよ。

音を立てないようにそつとディスプレイをひらいてみる。画面いっぱいに紙ヒヨーキのイラストが浮かび上がった。

新着のメールが一件あります。

だれだろ？

目だけで教室内を素早く見回し、このメールの送り主を探してみる。でも相変わらず気持ち良さそうに熟睡してる美樹は論外としても、沙織はさつきから仮頂面で教科書に落書きしてるし、いつもメールでちよつかいかけてくる愛子はボーイズラブのコミックを読むのに夢中だ。他にメールしてくるような子つていたっけ。

うーむ……。

とりあえずメールの中身を確認してみた。

「むこひやん、昨日のお面の卯月先輩と一緒にいたでしょ？
あたしのことを、むこ、って呼ぶクラスメイトは一人しかいない。
窓ぎわの一番後ろの席にすわってる、チャコちゃんを見た。パパイ
に出てくるヒロインのオリーブみたいに、ひょろりと背の高い女の子。
彼女はあたしと田が合ひと、いたずらっぽい視線でウインクし
てきた。

そして、ふたたびのメール。

卯月先輩とけっこ親しいんだね

だれそのひと？

あれ、知り合いじゃないわけ？

もう一度、チャコちゃんのほうを見る。シャンプーのCMに出て
くるようなせりせりした長い髪を揺らして、不思議そうに首をかし
げている。

あ、そう言えばヨウスケのお姉さんが、たしか自分のことを卯
月つて名乗つてたつて。とゆーことば、ヨウスケの苗字も卯月なん
だ。ウジキヨウスケ……。なるほどね。でもチャコちゃん、どうし
てヨウスケのこと知つてるんだろう？

チャコは、ヨウスケと知り合い？

すぐに返事が来た。

ヨウスケなんて知らないよー、だれそれ？

ああ、メールだと、まどろこしくてイライラする。はやくこのく
そつまんない授業終わんないかなあ。そう思った瞬間、金田一先生
がぐるりとこちらを振り向いた。そして手についたチョークの粉を
こすり落としながら、教室内を睥睨はじめる……。

「えー、じゃあこの問題、誰に答えてもらおつかな……」

あたしつて、じつこうとき決まってドジを踏む。おとなしく下向
いてりやいいものを、ぐるーり生徒の顔を見回す先生とばっちり田
が合つてしまつた。

「お、よしつ井上、答えてみる」

「げつ」

あんのじょう指名されて、イスの上でのけぞる。やっぱこぞやばいぞ、ぜんぜん授業なんて聞いてなかつたぞー。

「……えと

質問に答えられずもじもじしていると、先生がその鳥の巣みたいな頭をぐしゃぐしゃ搔きむしりながらつめ寄つてきた。

「うん? どうした井上、いまそかりの活用形だぞ、はやく答えろ」「いま……そかり? つてなんだつけ?」

「え、えーと……」

冷や汗をにじませながら、どつかに答え書いてないかなー、なんて教科書の上に視線を泳がせていくと、また携帯電話の「LEDが光つた。今それどころじゃないのに」……。でも発信者のメールアドレスが沙織のものだと知つて、ほつと安堵の息をつく。助かつた、神さま、仏さま、沙織さま……。先生にばれないよう注意しながら、そつとディスプレイを盗み見る。

「ばーか、ひきょうへんかくかつよひ、にきまつてんじyan
沙織つて見かけによらず、秀才だつたりする。

「はい、えつとお、ラ行変格活用です」

「よし正解。じゃあついでに、同じラ変のなかで、侍り、の未然形を言つてみる」

あわてて、ふたたび携帯へと視線を戻す。

はべらむ

と書いてあつた。

「侍らむ、です」

「……うん、まあ、ちやんと予習しているよつだな」

頭を搔きむしるのをやめて、先生はふたたび黒板へと向きなおつた。沙織に向かって手を合わせ、感謝の意を伝える。彼女は形の良い鼻をつんと突き上げ、あんなの答えられて当然でしょー、みたいな顔をした。

彼女は、ほんとはもっと偏差値の高い高校へ行けたはずなのに、

あたしや美樹や愛子たちと一緒にこの学校を選んだ。ケンジみたいな本物のおバカと付き合つてゐるせいで無理にレベル合わせて自分もバカっぽい言動してるけど、彼女の部屋には、あたしなんかじやとしても読みこなせないような分厚い哲学書が何冊も並んでいる。一度だけ、世界史の野口教諭と一神教について熱く論じあつてゐる様子を見かけたことがあるけど、スピノザとか、汎神論とか、アーニーズムとか、あたしの十七年間の人生では一度だって登場したことのないような難しい単語がぽんぽん飛び出してきて驚いた記憶がある。彼女の夢は、昔も今も変わらない。

報道カメラマンになつてインドのダラムシャーラーとか「うと」ころへ行くこと。そしてそこでチベット亡命政府の長、ダライ・ラマ十四世に会うことだ。

古典の授業が終わり、その沙織が両手を高く持ち上げてうーんと伸びをしながら、あたしの席までやってきた。

「金田一に指されるなんて、あんた要領わるすぎー。あいつは自分と田が合つたやつしか当てないのに」

「あはは、さんきゅー、おかげでまじ助かつたよ」

「じゃあ今日はひとつカレー味とこい」と、よひじへ

「……ほいほい」

じつは沙織に授業中助けてもらつと、一回につき学食でミニカツブ麺を一個おごらなければいけない。いつの間にか、そういうルールができてしまつた。若くして宗教や哲学なんかに造詣が深いくせに、ちやっかりしてるので、ほんと現金なやつなのだ。

彼女と無駄話しながらのろのろ教科書を片づけていると、後ろのほうから名前を呼ばれた。見ると、のっぽのチャコちゃんが黒髪を揺らしながら近づいてくる。

「あのね、さつきの話のつづきなんだけど……」

「あ、そうそう、彼女にヨウスケのこと訊くんだつた。

「うんうん、ヨウスケのことね？」

「……じゃなくて、ゆこちゃんが昨日会つていた、卯月先輩のこと

「まあ、どうちでも同じなんだけ……」

苦笑いするあたしに、沙織が不思議そうな目を向いた。

「なになに、なんの話？ ヨウスケ？ ウヅキ？ だれそれ？」

「「めん沙織、後で話すから」

そう謝つておいて、チャロちゃんのほうへ向き直る。

「どう、チャロ。その卯月先輩つて、下の名前なんてやーか知ってる？」

そう訊ねると彼女は隣の机に寄りかかって、長い黒髪の毛先を指でぐるぐるもてあそびながら言った。

「名前は、そうねえ……千里。つん確か、うづきせんり、だつたよ。

千里の道も一步から、の千里じゃないかな」

よつしや、ヨウスケの本名ゲット。あいつ、卯月千里つていうんだ。

あたしが感慨深げに何度もうなずいてごると、チャロちゃんは急に声をひそめて囁いた。

「……でもね、あのひとつて、なんかヤバいらしいんだ」

「うう……。

ふわり、教室のカーテンが揺れる。

ほどいて風になびかせた少女の髪の毛みたいに。

はた、はたと、白いナイロンの生地は、窓から入り込む夏の気だるさを受け流して、大様にひらめく。

やわらかな風がふわっと鼻先をなでてゆく。匂いを感じる。

校庭から流れ込む土の香り、草木の瑞々しさ、かすかな漂白剤と、

それから誰かさんの香水の匂い……。

ふわ、ふわり。

同時に、あたしの心にも小波が立つた。

「そのヤバいっての……ちょー綺麗とか、ちょー憧れぢやうとか、そういう意味での、ヤバい？」

「つうん、違うよ。ちょー危ないとか、ちょー関わりあいにならないほうがいい、みたいな、ヤバい」

チヤコちゃんは大まじめにそう言つて、あたしの田の奥をちらつと覗き込んだ。

うむむむ……。

たしかにヨウスケって、雰囲気ふつうじやないところがある。なんて言えばいいのかな、野性的というか、デンジャラスというか……、そう、まるで自由にサバンナを駆けて獲物を狩る肉食獣みたいなしなやかさと奔放さを備え持つていて。てつきり飼い猫だと思って抱き上げたら筋金入りの野良で、なにするんだよー、って暴れられて、顔や腕を引っ搔かれてしまう。そんな感じ。

でも、それってヤバいってゆーのとは少し違う気もある。

昨日、ほんの数時間だけ一緒に過ごしたけど、彼女からはいわゆる不良の匂いみたいなものは嗅ぎ取れなかつた。ただ自由気ままに、天真爛漫に、自分の思うがままに行動している。それだけ。そこに

性悪な攻撃性やすんだ人生観などは感じられない。

具体的にどうやばいんだ?」……。

「ねえチャコ、それってどっち方面からの情報よ?」

「うちの姉貴方面」

「ああ、ネネさん……。あれ、ひょっとしてユウスケって卯月先輩、ネネさんと同じクラスなわけ?」

「そうだよ。中ぼうのときも同級生だったし、今も一緒にクラスチャコちゃんには、ネネさんという年子の姉がいる。高校も一緒にで、つまりはあたしたちの先輩。

余談だけど、彼女たちのパパは若いころ太閤記の大ファンだったらしい。だからもし自分に子どもが生まれたなら、男ならば秀吉、女には寧々と名付けようと固く心に決めていた。でも子どもの名前を親の趣味で決めてしまつなんて、ずいぶんとはた迷惑な話だ。寧々はまあ良いとしても、秀吉なんて名前付けられた子どもって、かなり不憫だと思う。まあ幸いにして生まれてきたのは一人とも女の子だったけど、でもチャコちゃん、あやうく茶々という名前を付けられるところだった。茶々ってゆーのは、もちろん太閤秀吉の側室、淀殿のこと。けっきょく夫婦ゲンカのすえ折中案として茶子に落ち着いたんだけど、でもたまにカラシと読み違える子がいて、そんなときは未だにちょっとだけ親を恨むつて愚痴をこぼしていた。

そのチャコちゃんが口重に語りはじめた。

「なんかね、卯月先輩って中学のときは学校へ来たり来なかつたりを繰り返してたんだって。だけど登校拒否ってゆーのとはちょっと違うんだな。とくにイジメにあつてたわけじゃないし。なんて言うか、もっと深刻な事情つてゆーか、ワケアリっぽかつたみたい」

「それって単に病弱だったとか……」

「違う違う、いたつて健康、スポーツ万能、一時は陸上部に席置いてて、インターmidt;ルの県予選を上位通過したこともあるつて。でもね、中学二年のときだつたか、二ヶ月ほどまったく登校しなくなつたことがあって、そのときは京都にある医療少年院へ入れられ

たつて噂流れたみたい。先生たちも彼女のことは、まるで腫れ物にさわるみたいに扱つてたらしいよ」

「医療少年院……、それつてちょっと穏やかじゃないな。

「それとね、ここへ入学したばかりのころの話なんだけど、卯月先輩、恐い上級生たちに目え付けられて便所へ連れ込まれたんだつて。ほらあの人つてルックスちょー可愛いじゃない。普通にしても、やっぱ目立つちゃうらしくつてさ」

たしかにヨウスケつて目立つ。それは外見のケバケバしさとかじやなく、存在そのものの輝きが自然と人目を引いてしまうのだ。例えて言うなら、造花をたばねたブーケのなかに、一輪だけ生きた本物のバラがまじつている。だれが見たつて、その一本だけ瑞々しさが違う、美々しさが違う、命の輝きが違う。だから女の子はみんな彼女を見て、まず憧憬し、やがて嫉妬心を芽生えさせるのかもしない……。

「でもさ、美人の後輩をいじめるなんて情けない先輩たちだよね。まるで自分はブスだから面白くなくてやつてるんです、って喧伝してるようなものじゃん」

「まあそなんだけど……、でもね、姉貴たちが慌てて先生呼びにいって戻つてみたら、上級生たちみんな鼻から血い流して便所のタイルの上にうずくまつてたんですつて。で、当の卯月先輩はつてゆーと、洗面台とこで涼しい顔して手に付いた血を洗い落としてたつて……」

一瞬、頭のなかでヨウスケの精悍で美しい顔が、にやりと笑つた。あいつならやりかねない。不良の先輩たちを叩きのめすなんて朝飯前だらう。なにせ電車のなかで痴漢の指をへし折つたくらいだから。「うちの姉貴もさ、あの人とは一応友だち付き合いしてるけど、やっぱそれなりに距離は置いてるみたい。なんか一緒にいると、ときどき恐くなることがあるんだつて

「恐い……つて、どんなふうに?」

「ふだんはもの静かなんだけど、なにかの拍子に突然、豹変するの。

キレるとか癪癢起^{ハラハラ}すんじゃなくって、まるで人が違つたみたいになつてしまつて、ほら、ジキルとハイドって話あるじゃない。あんなふうに

ざわり。

心のなかで無数の蛾が羽ばたくように感情がうづめいた。すうく苦いものを飲み込んだときのように胃がきゅっと縮み上がる。なんだらつ、この胸騒ぎ。さつきまで、あんなにハツピーだったのに、心が萎縮して、ショーグかえつている。田ウスケのことが、だんだん分からなくなってきた。お腹に力が入らない。なんだか……息も……くるしい。

と思つたら、だれかに後ろから首を絞められていた。

「ぐ、ぐるじい……、ちょっとやべる」

必死に指をふりほどいて涙目で振り返ると、美樹が真っ白い歯を見せて笑っていた。やけにアイラインを強調したメイクが、まるでエジプトの壁画に出てくる女王様を思わせる、ちょっとエキゾチックな美人だ。

「なーに深刻な顔してヒソヒソやつてんのよ？ あー、さては、ゆみ子お、あんたもしかして……」

「……な、なによ」

「ハラんだわね！」

「ばつ、ばかなこと言わないでよ、彼氏もいないのにビーやつて孕めるつてゆーのよ、あんまり危ないこと言わないでよね」

「きやはは、ばーか冗談よ」

美樹はネムリヒメの異名を持つだけあって、授業中のほとんどの時間を夢の世界で過ご^{ハラハラ}している。その眠りつぶりは見事なもので、まるで充電中の家電製品みたいにひつそりと、しかし確實にエネルギーをため込んでいる。居眠りのしかたも巧妙で、古典の金田一みたいに注意しない先生のときには堂々と机に突つ伏すけど、数学の前田のようにうるさいやつの授業では、あたかも頬杖ついて教科書と睨めっこしてくるふうを裝つて、目立たないようこんこんと眠り

続ける。とにかく授業中はひたすら眠っているのだ。そのおがげで休み時間になると元気百倍、勇気凜々、迷惑千万、妙にテンションが高くなり、うるさいことこの上ない。

「妊娠したんじゃないとしたら、なに真剣な顔して悩んでんのよ？ ねーねー、教えろよお」

「せひ、あたしも聞きたい」

沙織が腕を組んで、美樹に同調する。

「え、だれだれ？ だれが妊娠したって？」

そこへ、ボーイズラブのコミックを読み終えた愛子もやつて来て、三人であたしを取り囲むかたちとなつた。

「だからー、妊娠したとかそーゆーあぶない話じゃなくって仕方ないなあ、もう……。」

チャコちゃんと田を合わせてくすっと苦笑いしてから、あたしは三人の友人に向きなおつた。昨日出会つた不思議な女の子、ヨウスケのこと、とても美人で、謎めいている、その彼女の話を、順を追つて聞いてもらひことにしたのだ。

つづく……。

チャコちゃんのモテルは、トコという人で、作中のキャラコと同じ十七歳です。でも髪は茶髪で、しかも少し発酵してるかな(笑)。チャコちゃんのほうは、黒髪がきれいな背の高い美人だもんね……。

知らない誰かさんの人となりを説明するのって難しい。

ましてやあたしのように、いつも思いつくまま直感的に「ノリノリケーションプロセスを踏んでる人間ならば、なおさら……。

自分としてはヨウスケのことを個性的で、神秘的で、きらきらまぶしくて、なんだか謎めいていて、すごく素敵な子だなって思つているのに、そのことを上手く表現できない。ちょー可愛いとか、めっちゃ面白い、だなんて珍しいボキャブラー駆使しようとなればするほど、彼女のことがチープに伝わってしまう。もう、はがゆくて、もどかしくて……。

あたしは苦心惨憺、大汗かいて熱弁ふるつたつもりだけど、それに対する沙織たちの反応は冷ややかだった。

「なーんだ、ようするに見た目可愛いってだけの、たんなる暴れん坊じやん」

「つーか、なんかヤバくねそいつ。自宅のベランダで大麻とか栽培してね？」

「もしかして、あんたレズつ気あるでしょ？ うわー、ちょーあぶの一まる」

あたしは、へなへなと脱力してなめぐじみたにべつたり机にはり付いた。

「……もう帰れよ、お前ら」

「だつてさ、今の説明聞いたかぎりじゃそのヨウスケつて子、顔は可愛いけど、がさつで乱暴者で、おまけに得体の知れないところがあるつてゆー、ちょっとイタいキャラなわけじゃない？ どう考えたって、あんたが言つほど魅力的とは思えないんですけど」

「そうそう、だから何よつて感じ。ルックスさえ良ければ人生それでいいのかい、みたいな」

「男は度胸、女は愛嬌を地でいくような立ち位置つて、それちよ

とウザくね

友人たちの一斉攻撃にあたしは、たじたじとなり、ふてくされてそっぽを向いた。

「ふん、しょせんロマンティシズムに欠ける少女たちには、いくら説明したってムダのようね……」

「なーに言つてんのよ、そんなチヨコで固めてシュガーコートしたような甘々のロマンスなんて、バージンと一緒にブティックホテルのセニタリー・ボックスへ捨ててしまつたわ」

「うわ、なんて下品な……」

そのとき、あたしたちのやり取りをちょっと離れたところから傍観していたチャ「ちやんが、少し戸惑つた様子で言った。
「でも、そのヨウスケってひと……あたしの知つてる卯月先輩とは、ぜんぜん雰囲気違うみたい」

「そうなの？」

ワンピースの襟に垂らした黒髪を揺らし、彼女はこくりとうなずいた。

「あの人とは何度も顔合わせてるし、いっぱいお話もしたけど、そんな乱暴な言葉使うひとじゃなかつたよ。すこくおしとやかだし、それに見ず知らずのひとのバイクにいきなり跨がつたりなんて絶対しないと思つ」

「うむむ……じゃあヨウスケと卯月先輩とは、他人のそら似？ まさかね、だつてあんなにルックス目立つやつ、あたしたちの周りにそうはいないよ」

「あのわ」

不意に沙織が言った。

「その卯月先輩ってひと、じつはヨウスケのお姉さん、つてことない？」

「ないない。あいつのお姉さんは美人の〇〇で……」

あれ、ちょっと待てよ。

考えてみたら、あたしヨウスケのお姉さんのこと、なにも知らな

いや。美人の〇しつてゆーのも、じつは勝手にそう思い込んでるだけ根拠があるわけじゃないし。だとすれば……そつか、なるほど、そういう可能性だってあるわよね。姉妹といえどあそこまで似るのか？みたいな疑問はひとまず置いといて、そういうことなら、すべての疑問に説明がつけられる。

今朝見かけたヨウスケに酷似した生徒は、昨日出会ったヨウスケとは別人ではあるが、他人ではない。キヤラは違うが、外見はそつくり。なんたつて、血のつながった姉と妹なんだもん。

頭のなかで、かなり低次元なジグソーパズルの欠けていたピースが、ようやく見つかった。

「さすが沙織、あんたつて頭いーね、だてに哲学書とか読みあさつてないよ」

「ふん、今さらなに感心してんのよ。同じものと等しいものは互いに等しい。これユークリッド原論がしめす公理、ドゥーゲーヤンダスタン？」

「なにそれ、ぜんぜん意味分かんね。つか微妙に使い方間違ってる気がするし」

「ふん、アダマールの三田定理も知らないくせに」

「そんなの授業で習つてないし」

ふくれつ面のあたしに、美樹が言つた。

「いつそ、卯月先輩つてひとに会つてみたらどうよ？ あたしたちも付き合つし」

「え……」

「こじで、うだうだ言つても始まんないじゃん。一緒についてつてあげるからや」

「まじ？」

「まじ」

顔を上げてみんなを見回す。全員真顔でうなずいてくれた。

「ありがと、みんな……」

でも一人残らず目の奥が笑っていた。

「……その提案はさ、純粹に友情から出たものだと信じていいいのよね」

「友情が五パーセント、残り九十五パーセントは好奇心」

「うわ、友情少なつ」

「でもさ」

前列の席に陣取っていた愛子が、あたしの机に頬杖つきながら言った。

「そのひと、いきなりあたしたちに襲いかかってきたりなんてしないよね」

「なわけないじゃん。おしとやかなひとだってチャコも言つてたでしょ」

「……でも、突然豹変するのよね」

美樹が、ぽんと手を打つた。

「そうだ、あたし十字架持つてるよ」

「はあ？」

ワンピースのポケットから、大ぶりのロザリオを取り出して、あたしたちに見せた。

「ほらつ、けつこう雰囲気あるつしょ」

ネックレスとして作られたなんちゃつてロザリオとは違い、ちゃんとキリスト像が彫り込まれた本格的なものだつた。

「役に立つかなこれ、ぜつたい立つよね？」

「立つわけないじゃん。てか、なんでそんなもん持つてるわけ？」

「このあいだホラー映画観てて思ったの。リアルでも不意に吸血鬼とか襲つてきたら怖いじゃん。だからなにか身を守るためのものを、ふだんから用意しておかなきやつて」

「あの方……」

「カトリックの教会に通う友だちに頼み込んで譲つてもらつたんだ。これさえあれば、吸血鬼もたじたじ。まあ言つてみれば、水戸黄門の印籠みたいなものね」

「ばつかでー」

鼻で笑つてやつた。つづか、ミウスケはドリキュラじゃないっての。

なんだか急にばかりしくなり、あたしは次の授業の準備に取りかかりながら、みんなに宣言した。

「やっぱ、ミウスケのことは自分で確かめるよ。放課後ひとりで卯月先輩に会いに行つてみる。結果は、夜にでもメールでみんなに報告するから」

そうきつぱり言つと、沙織たち三人はのろのろと腰を上げ、ワンピースについてシワをのばしながらため息をついた。

「なーんだ、つまんね。つき合つて時間そんした」

「せつかく探偵ごっこで暇つぶせると思つたのに」

「自分から話題ふつといて、最後それはないよね」

ぶつくさ文句を言いながら、めいめいの席へと戻つてゆく。

……一瞬でも、友情なんて信じたあたしがバカだった。

帰りしな、美樹があたしのほうを振り返り、手の中でロザリオを揺らして見せた。

「一応、これ持つてく?」「いるかつ!」

……くづく。

ゆみ子、宇宙人に連れ去られる

さつきから頭のなかで、映画『ピンク・パンサー』のテーマがく
り返し流れている。こんなに緊張してドキドキするのって、沙織た
ちと高校入試の合格発表を見に行つたとき以来だ……。

あたしは、トラップだらけのダンジョンを探索する勇者一行なみ
の用心深さで、盛夏の干上がった舗装路をそろそろと踏みしめてい
た。ローファーの靴底がじやりっと小石を噉むたび、とくんと心臓
が高鳴る。じうじう緊迫した雰囲気つてちょ一苦手。気合いを入れ
れば入れるほど、あたしは決まってドジを踏む。そのため、いやが
上にも動作が慎重になつてくる。軽くにぎつた手のひらがじつとり
と汗ばんで気持ち悪い。ところが、こんなに気を張つて歩いている
にもかかわらず、その実あたしの足はまるでふわふわと雲の上を進
んでいるような、そんな頼りない感覚を伝えてくるのだつた……。
前方、約十メートルほどのところを、白いワンピースを着た女
子が歩いている。

ちつちやくて可愛いベージュ色の革製リュックを肩に引っかけ、
まるでパリコレのステージを周回する美人モデルみたいに優雅に足
を運んでいる。

卯月先輩。

あたしは、彼女が本当にヨウスケのお姉さんなのかを確かめるべ
く、放課後の校門わきで待ち伏せを試みた。例の当たつて砕けるの
精神つてやつ。ところがいざ数人の友だちに囲まれ楽しそうにおし
やべりしながら出てくる彼女を見て、どうにも声をかけるだけの勇
気がわいてこなかつた。もしかすると自分は、とんでもない見当違
いをしているのではないか……そんな疑問が胸をよぎつたからだ。
人待ちを装つて立ちんぼうするあたしの目の前を、彼女は悠然と
通り過ぎていつた。緊張してちらりと見ることしかできなかつたけ
ど、やはりヨウスケとは別人のようだ。確かに似てはいるけど、ぜ

んぜん違うひと。人格を形成している根源的な部分があきらかに異なっているように思える。言い換えれば、まったく別の魂を持つた存在つてこと。ほんの一瞬横顔をうかがつただけで、すぐにそれが分かった。ヨウスケじゃない。同時に、彼女が持つなにか得体の知れないパワーと言つか、抗いがたい魔力のようなものを感じて鳥肌が立つた。

あの人すごく、変。

どう例えたらいいか分かんないけど、むりやり表現するならば、ちょ一豪華フルーツてんこ盛りトロピカルドリンクのその中身が、実は違法薬物を混ぜ合わせて作った幻覚剤入りカクテルだった、みたいな……。

チャコちゃんの言った通り、きっとヤバいひとに違いない。そう確信したにもかかわらず、あたしは彼女のあとを尾行した。いや、体が勝手に引き寄せられ、意思とは関係なく足が動いてしまつたと言つたほうが正しいのかもしれない。まさに怖いもの見たさとゆーやつ。校門を出たところで彼女はバス停へ向かう数人の友だちと別れ、自分は通りを西へ向かって歩きはじめた。もしヨウスケの暮らすあのアパートへ帰るつもりなら一応方角としては合つている。まあ、徒歩で帰るにはちょっと遠いけど。

とにかく、それから彼女とあたしの尾行劇は始まった。

しばらくすると途中まで彼女と一緒にいた友人はひとりまたひとりと道を折れてゆき、やがてあたしの目の前には卯月先輩の華奢な後ろ姿だけが残つた。つかず離れず……、優雅に歩く彼女の背中を追つて慎重に歩みを進める。

おしゃれにスタイリングされたショートヘア、舞台女優のようにきりつと伸びた背筋、細い肩、小さなお尻、引き締まつた足首……なにひとつとつてみても完璧な後ろ姿。匂い立つような美少女であることに関しては、ヨウスケと比べて少しも遜色がない。ぜつたい姉妹に違いない……。高まりつつある確信が胸を締めつけ、次第にじりじりしてくる。いつそ駆け寄つてストレートに訊いてやろうか

な。

あの、ひょっとしてヨウスケのお姉さんですか？
なに言つてんの、違うわよ。つてか、あんただれよ？
いや、あたしは、その……。

意を決しかね、まじまじしていると、彼女は一軒のCDショッピングモールへ足を踏み入れた。あたしも一呼吸遅れて自動ドアをくぐる。ここには沙織たちともよく来る。駅前にある量販店なんかに比べて規模は小さいけれど、いつも最新のヒットチャートばかりを追いかけてるあたしたちにとっては、じゅうぶん過ぎるほどの中古品揃えがある。

しかしそんな流行のヒット曲には目もくれず、卯月先輩は店の一番奥にあるクラシック音楽専門ブースへと入つていった。他の売り場の喧騒をよそに、そこだけ別世界のように優雅な時間が流れている。タクトを振るどつかの国のちょー偉い指揮者のポスター。CDを収納するラックだって重厚な作りの木製のものを使っている。ここは、あたしにとつてはまったくのトワイライトゾーン。沙織なんかはたまに覗いてるみたいだけど、あたしは一度だって足を踏み入れたことがない。そんな格調高い売り場で、卯月先輩は探しものをしているふうでもなく、ただぼんやりとCDを手に取つては眺めていた。あたしは、その様子を少し離れた位置から気づかれないように注意して盗み見る。クラシック音楽なんてぜんぜん興味ないけれど、不審に思われたら困るのでたまには商品を手に取つてみる。CDを決し、恐る恐る彼女のほうを振り向いた。

「ちょ……ひん？ ってだれよ」
ふと顔を上げると、彼女のほうも何気ない仕草でこっちを見た。ぱっちり目が合つた。やばばばばい。反射的に顔を背ける。冷や汗が背筋を伝づ。あたしが尾行してたのバレちゃったかな？ 目を閉じて心のなかでゆっくり数をかぞえる。いち、にい、さん、しい……もういいかい？ もういいよ。さらに一呼吸おいてから意を決し、恐る恐る彼女のほうを振り向いた。
いなかつた。

「あれ」

きょろきょろと店のなかを見回す。彼女の姿は、いつの間にかアソンのコーナーへと移っていた。テレビショトンできるんかい。さすがに金魚のフンみたいにびつたり後を付いて回るわけにもいかず、どうしようかと考えあぐねているところへ、カーテンで厳重に仕切られた薄暗いブースを発見した。ちょうどそこからは彼女の位置がよく見渡せるし、逆にカーテンに遮られて彼女からはこっちの姿がよく見えない。これぞまさに、べすとぼいんとしめしめ……。

あたしは気づかれないよう、カーテンの奥へそろりともぐり込んだ。

アダルトビデオのコーナーだった。

月間売れ筋ベストテンのトップワンは、『衝撃！ ブルマー女子高生キヤットファイット』で大乱闘』だった。

ななな、なによ、ここーつ！

びっくりして髪を逆立てた瞬間、そこにいた数人のおっさんが一斉にこっちを見た。全員目のなかで無数の星がきらきらと輝いている。無理もない、えつちビデオを物色しながら、あーでもない、こーでもないと妄想を膨らませているところへ、あたしみたいな可憐な美少女がいきなり飛び込んできたのだ。しかも、しゃがんだらパンツ見えそんなくらいミニ丈のワンピを着ている。これはもう、腹を空かせた野良猫の群に向かつてカツオブシを投げ入れるようなもの。ひええつ。好色そうな視線を一身に浴び、あたしは大慌てでそこを飛び出した。

死ねつ、バカつ、えつち、変態つ、女の敵つ！
どん。

勢い良くカーテンをぐぐり抜けたはずみに、だれかとぶつかつた。

「きやあ、ごめんなさい」

卯月先輩だった。

「げ……」

どうやらあたしが飛び出してくるのを察知していたらしく、その細い体でしつかりと抱き止めてくれた。

もうバカバカ、あたし先輩のこと一生離さないからっ！
端から見れば、そんなセリフが似合いそうな場面だけれど、でも実際は大違い。ちょー大ピンチの構図なのだ。

「あわわわ」

驚いて彼女の腕から逃れようとしたけど、両手でがつちり肩をつかまれ、しかも真正面から見つめられてしまった。こうなつたらもう蛇に睨まれたケロロ。あたしは身動きとれないまま、しだいに彼女の美しい瞳に飲み込まれ、動きを封じられていった。

「あ、あの……」

彼女は、につこり笑つて言つた。

いや、歌つた。

「探しものはなんですか　見つけにくいのですか　カバンの
なかも机のなかも　探したけれど見つからないのに」

「えと……、あのですね」

「まだまだ探す気ですか　それより僕と踊りませんか」

かへ　夢のなかへ　行つてみたいといませんか

夢のな

うふふ。

彼女が笑つた。あたしもつられて引きつった笑みを浮かべた。
えへへ。

そこでようやく彼女は、あたしの肩から手をはなしてくれた。全身の力が抜けで、へろへろとその場に座り込んでしまった。お尻がぺたんと床について冷たいリノリウムの感触を味わう。そうしながらもあたしは彼女から視線を逸らすことができず、まるでキリスト像に向かつて祈りを捧げる敬虔なクリスチヤンみたいに眩しそうにその顔を見上げていた。どうかご慈悲を、あーめん。

そんなあたしを尊大に見下ろし、彼女は小首をかしげながら言った。

「私になにかご用かしら？」

「あの……ですね」

「まさか、あなたも私のことを宇宙人だと思っているの？」

「う、うちゅうじん？」

「そうなのね？」だから、」そこそ後をつけてきたんでしょう

唐突におかしなことを言われて戸惑つたが、ここはひとつ全力で否定しなければならない場面だと確信した。あたしは鼻水が出るほど勢いよく首を左右に振った。ぶるんぶるん。

「ち、違います。そんな宇宙人だなんて」

「あらら、なんだ違うの……」

急に彼女は悲しそうな表情を浮かべた。

あたしは途方にくれた。

つづく……。

ゆみ子、宇宙人に連れ去られる（後書き）

だんだん、ゆみ子のキャラが壊れてゆく……。

「そんなところへ長いあいだ座つていると、病気になつてしまつわよ」

卯月先輩は、床の上にへたり込んでいるあたしにやつと手をさしのべた。恐る恐る、その手につかまる。すべすべした細く長い指からひんやりとした感触があたしの手のひらへ伝わつてくる。ネイルカラーは上品な色合いの淡いピンク。ただしどの爪にも、ルビーミたいに赤く燃えるネイルストーンが散りばめてあつた。中指には、翡翠を削つて造つたような綺麗なリングが嵌められている。少しためらつてから軽く握りしめると、彼女はぎゅっと強く握り返してきた。そのままぐいっと腕に力を込め、あたしのことを引っぱり上げる。

「きやつ」

華奢な体に似合わず、けつこつな力持ちだ。あやつへもつ一度、彼女の胸のなかへ飛び込んでしまうといつだつた。

「あ、ありがとうございます……」

「すぐにお尻を消毒したほうがいいわね」

「え、なんで？」

「あら、知らないの？　AV売り場の床には、病原菌がつようよしているのよ。淋菌、クラミジア、カンジダ菌、ケジラ……」

「ふええつ！」

慌てて、ワンピの上からお尻をぱたぱたと払つた。氣色悪つつ、後で手も消毒しなくてや。

「そ、そんなの感染させられたら、もつお嫁に行けなくなっちゃいますうつ」

「バカね、冗談に決まつてるでしょ」

「ああ……、冗談だつたんですかあ」

あたしがほつと胸をなで下ろすと、上から目を覗き込むようつて

して、彼女が笑った。

「ふふ、あなたって素直な性格してるのね」

「えと……」

「褒められたのか、はたまたバカにされているのか……？」

「良く言えば天真爛漫、悪く言えば単純明快、ってところかしら」

「どうやら、さりげなくバカにしているらしく。」

「じゃ、行きましょうか」

彼女はさつと身をひるがえすと、クロショップの出口めざして歩きはじめた。急いで床からカバンを拾い上げ、あたしは小走りでその後を追つた。

「あの……行くつてどこへ？」

「デネブ・カイトスよ」

「へ？ でね……ぶー？」

「プレアデス星団にある一等星の名前なの」

「うむむ……言つてることがさつぱり分からん。どこまでが冗談で、どこまでが本気なんだか……」

冷房の効いた店内から一步外へ足を踏み出すと、鋭い夏の陽射しつともに再びうだるような暑さが襲いかかってきた。頭のてっぺんがちりちりと焼け、脇の下からどつと汗が吹き出す。どこか先のほうで道路工事でもしているらしく、渋滞して数珠つなぎになつた車の列から不快な排気ガスがとめどなく流れ出している。あたしは軽い立ち眩みのようなものを感じながら、目の前の横断歩道を渡つた先にドーナツ店があるのを発見し、すがるような思いで彼女に訊ねてみた。

「あ、あの、そこのドーナツ屋さんでなにか冷たいものでも飲みませんか？ もちろん、あたしのおこりです」

すると卯月先輩はわずかに顔を振り向け、嬉しそうに言った。

「あら、あなたにもテレパシーを使う能力があつたのね」

「え？ テレパシーですか？」

「そうよ。ちょうど私も今、あの店へ強引にあなたを連れ込んで、あれこれ因縁つけては冷たい飲み物でもおごらせようか、なんて考えていたところなの」

「ひえー、なんでも好きなもの」馳走しますから、因縁とかつけないでください」

「うーん、どうしようかな……。あなたってちょっと被虐的な可愛らしさがあつて、本能的にい虚めたくなっちゃうタイプなのよね」「可愛らしいという言葉だけありがたく受け取つておきますので、どうかその本能は理性で封じ込めておいてください」

「一応、努力はしてみるわ」

フライングソーサーと書かれたその店の看板には、稚拙な絵でF.Oとタコのお化けのよつな宇宙人らしきものが描かれていた。入り口のガラス戸を押し開けると、甘つたるいドーナツとコーヒーの香りが肺のなかへ流れ込み、たちまち食べ盛りのお腹が化学反応をおこして、ぎゅるつと鳴つた。見ると店内はそこそこ混み合つていたが、ちょうど高校生のグループが席を立つところだったので、入れ替わるよつにしてそこを陣取つた。

「卯月先輩は、なにがいいですか？ あたしちよつと小腹がすいたのでチヨコリングとかも食べますけど、先輩も飲みものだけじゃなく好きなものを遠慮せずに仰つてくださいね」

「あら、私の名前を知つてているのね？ そういうえば、あなたのそのバカっぽい喋りかた……、私どこかで聞いた覚えがあるわ」

「……あの、たぶん昨日の晩に電話でお話したんだと」

彼女は、ぽんと手を打つた。

「あなた、昨夜電話してきたヨウスケのお友だちね。なんだ、それならそうと先に言つてくれれば良いのに。てつくり私のことを宇宙人だと勘違いした頭のなかがちょっとM.I.Bな後輩のひとりだとばかり思つていたわ」

「ええっ、そんなおかしな妄想に取り憑かれた生徒が、うちのがつこには何人もいるんですか？ つてか卯月先輩、やっぱりヨウスケ

のお姉さんだつたんですね。……ああ、良かつた」

ほつと安堵の息をついた。その真相を知りたいがために、ここまで彼女を追つてきたのだ。美人の〇〇」というささやかな妄想は消えてしまつたけど、ヨウスケと瓜二つのお姉さんが同じがつこの先輩だつたという事実をあらためて確認し、すつと心の晴れる思いがした。さつそく今晚、みんなにメールで知らせてやろう。上機嫌で微笑んでいると、彼女はホステスをからかう中年おやじのような卑俗な視線をあたしに向けてきた。

「ふーん……なるほどねえ」

「な、なんですか？ そんな、いやらしい目があたしを見ないでください」

「あなたつて顔も可愛いけど、ほんと美しい足してるわね……。すらつと真つすぐに伸びていて肌もきれいだし、それでいて妙に扇情的というか肉感的で」

「あはは、……それはどうも」

「知つてた？ ヨウスケつて筋金入りの足フェチなのよ」

「さ、さいですかー」

このひとは、いきなりなにを言い出すのやら。そんなちょ一個人的な嗜好なんか知つてもあまり嬉しくない。

「ただあの子つて小さいときから噛みぐせがあつてね、ふにふにした白い肌を見ると無意識に歯を立ててしまうらしいの。だから、えつちするときなんかはじゅうぶん注意してね。下手をするとあなたの太ももやその可愛いお尻に、キスマークならぬ歯形がいくつも残つてしまつという淫猥な事態を招きかねないから」

「は、恥ずかしいこと言わないでください！ てか、女の子同士でえつちなんかしないと思います」

「あら、ヨウスケは男の子よ」

「え……」

さらつと言われてしまった。やはり一ユーハーフだったのか。あんなに可愛いのに。『ポップティーン』誌とかの紙面をにぎわして

いる人気モデルなみの美少女なのに。胸だって、あたしのよりずっと立派だし……。

そんな鬱屈した心情をあたしの顔から読み取ったのか、彼女が付け加えて言った。

「でも、まあ生物学的に言えばメスといつことになるのかしら。あは、メスって言い方はちょっと低俗だったわね。でもあとにかく安心してちょうだい、体のほうは全くの女性そのものだから」

かえつて安心できませんけど。

「じゃあ、じゃあ、あのあの、よつするに、いわゆる……性同一性障害ってやつですか？」

「あら、難しい言葉を知っているのね。まあ、当たらずといえども遠からず、つてところかしら。私はあいにく病理学的な知識は持ち合わせていないから正確なところは分からぬけど、あの子の場合、肉体と性自認が一致しないとかそういう問題じゃなく、誤つて女の子の体のなかへ男の魂がまぎれ込んでしまつたという表現が近いのかしら。うーん、やっぱり分かりづらいかな、姉である私にはじゅうぶん理解できるんだけど……」

「単純おバカなあたしの脳ミソでは理解不可能みたいですね」

「まあいいわ。でもその男としての魂は、すっかりあなたに恋してしまつているらしいのよ。姉である私にはよく分かるわ、あなたのことがどつても好きみたい。もちろん異性としてね……」

好き とか言つちゃいましたか、本人より先に、お姉様の口から……。まあ、薄々感づいてはいたんだけど、てかあたしもヨウスケのこと好きだし、でも女の子だし。魂うんぬんは別として……。

「さてと……」

卯月先輩はメニコーを手に取つて眺めた。

「じゃあ遠慮なく、将来の義理の妹に『馳走してもらおうかしらね』まだ結婚するとか決めてないし。といふか戸籍上できないかもしないし。

「ええと、そうねえ……フレンチクルーラーに『ココナシレイズド、

ハーディップ、エンゼルクリーム、あとベルリーナーとクラップ
ファンもいいわね、それとマダガスカルバニラに、えとせとら、え
とせとら……と

「え、えーっ！ そんなにひとりで食べるんですかあ？」

「甘いものは別腹なのよ、いくらでも食べれちゃうの。ましてや他
人のおこりだと、なおさらなのよね」

「あは、あははは……」

ふと、昨日バイキングではしゃぎながら食べまくっていたヨウス
ケの姿が頭のなかをよぎった。さすがは姉妹？？いや姉と弟……。

つづく……。

ガール・ミーツ・ボーイ

日曜日の空も、やはり底抜けに青かった。

まるで薄荷水を詰め込んだボトルの底みたいに清々しいブルー。部屋の窓をあけて見上げると、視界を斜めに突つ切つて真っ白いヒョーキ雲が三本すーと東の空へ伸びていた。なんだか絵葉書にでもして残しておきたくなるような、そんな心地のよい朝。

階段を下りて居間のドアをあけると、ママが窓辺にならべたプランターに水をやっているところだった。ちょうどゼラニウムの鉢植えが満開で、濡れたミカン色の花弁が朝日を浴びてきらきら輝いていた。キツチンから、ブラックペッパーの香ばしい匂いがただよってくる。見ると、パパが堂に入ったフライパンをばきで、サイコロステーキを焼いていた。

洗面台へ行つて大きな鏡に自分の顔を映し出してみる。たっぷり一時間かけてメイクアップしたその顔は、なんだかつんと澄まして少しよそよそしく見えた。にっこり笑つてみる。鼻の穴がちょっと広がつてあまり可愛くなかった。今度は媚をふくんだような目で憂い顔をつくつてみた。まるで不良のお姉さんがガンを飛ばしているように見えた。だめだ、こりゃ……。すると鏡に映つた間抜けな百面相の後ろから、ママがぬつと顔をのぞかせた。

「あらっ、今日はやけにめかし込んでるじゃない。さては男の子とデートだつたりして……」

「デートという言葉を耳ざとく聞きつけて、パパもフライパン片手にことことやって来た。

「なになに、ゆみ子おまえ彼氏いるのか？ どんな男だ？ パパよりも良い男か？」

まゆを八の字にして情けない顔をする。

「ちょっとお、おーコーのキャミソールに油っぽさないでよ」

「ああ、『じめん』じめん」

「この世にパパより良い男なんているわけないじゃん

と言いつつ、さりげなく手を出す。このあいだパパからもらった一万円は、もう半分くらい使つてしまつていた。このはひとつ補正予算を……。しかしその厚かましい手のひらを、ママが容赦なくぴしゃりと打つた。

「あ痛てつ

「もうやつて男をたぶらかしてお金をせしめたりとしていると、将来ろくな女にならないわよ」

ママのとなりで、その彼女にたぶらかされた本人が相づちを打つた。

「うんうん、ママの言つ通り……

「ふんだ

作戦、失敗。しかたなくあたしは、もつ一度鏡を振り返つてリップの輝きぐあいを確認してから、それをとて面鏡を出た。

「じゃあ出掛けるから」

「あれつ、朝メシ食わないのか？」

「ごめん、外で食べるの」

「せっかくお前のために、お肉焼いたのに……」

「朝っぱらから、そんな脂っこいもの食べたくないし」

「しかたない、じゃあお前の分はパパが責任もつて処分するとじよう」

「つてか、最初から自分が食べたかっただけでしょ」

パパは今年の春メタボ検診で引っかかり、その後しばらくは料理を作るとき食事バランスガイドを手放さなかつた。しかし、だんだん危機感が薄れてきたらしく、最近ではまた飽食ざんまいの日々を送つてゐる。この分だときつと来年の検診でもアウトの判定を受けに違ひない。

「今夜は手巻き寿司にするから、なるべく早く帰つてこいや

「うん。でももし遅くなつてもウーと甘エビだけは残しておいてね

「たぶん、真つ先になくなると思つた」

「もう、パパの意地悪」

玄関でパンプスに足をねじ込んでいると、後ろからママが心配そうに声を掛けてきた。

「あんまり遅くなっちゃダメよ」

「はい」

「あと調子に乗つて変なことしないでよ。お母さん、まだ孫の顔なんて見たくないんだから……」

なにを言うか。

「じゃあ行つてきまーす」

「行つてらっしゃい」

お気に入りのトートバッグを肩に引っ掛け、玄関ドアをあけた。七色に渦を巻く太陽光線をまともに浴びて、くらつと目眩がした。バッグから、つばの広いレディースハットを取り出して頭に乗せる。キャミと同色のペパーミントグリーン。左耳の上あたりに、レースを編んだ大ぶりの「サージュ」が付いている。ふと横を見ると、雨よけカバーをかけたままの愛車ヤマハ××ビラーゴが、朝露に濡れながら所在なさげに佇んでいる。そつと燃料タンクを撫でてやつた。

「今日は、あんたはお留守番だよ。また今度、一緒に遊んであげるから」

ヨウスケと約束した時間までには、まだかなりの余裕があつた。あたしは両手を広げてうーんと深呼吸すると、駅までの道のりをバス停ひとつ分だけ歩いてゆくことに決めた。

休日の駅ついていつもそうなんだけど、一種異様な熱気と、香水や整髪料のにおいと、そして抗いがたいような焦燥感に満ちている。そんなに喜び勇んで一体どこへ遊びに行くんだろう。せっかくの休みなんだから、もつと心に余裕を持つて過ごせばいいのに。

待ち合わせ場所に、まだヨウスケの姿はなかつた。かつてタバコの自販機と喫煙スペースがあつたその場所は、今は白い丸テーブルとイスが並べられ、人待ち顔の若い男女であふれかえつていた。手

持ちぶさたで壁に寄りかかって携帯をいじくり回してると、續けざまに男の人から声を掛けられた。

「あの、ファッショントマガジンのモデルになりませんか？」

「なりません」

「いつの店で働きませんか？ ひと円に軽く百万くらいは稼げますよ」

「働きません」

「ビデオに出演してみませんか？ 口けばハワイのワイキキビーチで行います。あ、もちろん水着姿になるだけです」

「出演しません」

だんだんイライラして腹が立ってきた。おかしなスカウトマンから声を掛けられるために、頑張つておめかししたんぢやない。なるべく他人と目を合わせないよう携帯画面に集中していると、視界の端っこに、またひとり男の人があきらかに自分田ざして近づいて来るのが見えた。

まつたくもうつ！

あたしの横で立ち止まつたその男に、振り向かれまく口をひらく間もあたえず言つてやつた。

「日本も、キャバクラも、エッチビデオも、みーんなお断りしますからつ！」

「え？」

「あれ」

コウスケだつた。

「なんだか知らぬ一けど、いきなりわけも分からずに拒絶されちまつたよ……」

「あはは……」めんね、ちょっとしたミステイクなの

言いながら、あたしはドギマギマギしていた。なんだか今日は、この前とは雰囲気違う……。

前回会つたときは明らかに女の子の姿だったけど、今日の前にいるコウスケは完全に男の子のファッションをしていた。白い開襟シ

ヤツの上に、ダークグレーの「つボタンジャケットをはおり、ウHスタン調のカーゴパンツをロールアップしてはいている。カラーレザーを一重にしたチョーカーが、なんともワイルドな感じ。胸の膨らみがほとんど分からるのは、コルセットかなにかで締め上げているのかな……。あの精悍で美しい顔も今日は一段と引き締まつて見え、なんだか飛びつきりの美少年つて感じだ。

「なーに見とれてんだよ、おめーは」

「いや、あの……マジで格好いいなつて思つて、うん、あたしちょつと惚れちゃいそう」

「おめーも、びっくりするくらい可愛いやせ。まあ、俺のためにお洒落してきたつてわけじゃねえんだろうけどよ」

「またそんな……、相変わらず口が悪いのね」

「ひょっとしてお姫様は、腹が減つて気が立つているのかな？ よし、取りあえずなんか食いに行こうぜ」

言つが早いが、あたしの指に強引に自分の指をからめてきた。えーっ、手をつないで歩くなんてちょー恥ずかしいよ、小学生のカツブリじやあるまいし。でもヨウスケのジャケットにあたしの肩が触れた瞬間、なんか胸がきゅんとなつた。ほんと男の子だつたら良かつたのに……。あたしは、そこからスター・バックスでいつもの席につくまでのあいだじゅう、なんだか地に足がつかずふわふわ夢のながを歩いているような感覚を味わつた。いや、イスに腰掛けて目の前にフラペチーノとチョコレートマフィンが並べられてからも、ぼーっとヨウスケを見とれていた。

ほんと男の子だつたら良かつたのに……。

「おめーこの前、千里ネエに会つたんだつて？ 同じ学校に通つてたんだつてな」

「え、あ、うんそつなの。ぐうぜん校門の前で見かけてびっくりしちゃつた」

ヨウスケが、ぐつと身を乗り出してくる。

「でよう……、千里ネエは、俺のことなんか言つてたか？」

「べつに」

「隠すなよ」

「隠してなんかないもん」

「また、おっぱい揉んじゃうぞ」

「揉まれたら、揉み返す」

「ははは、今日は俺様のおっぱいは完璧にゴーティングしてあるから、揉むのは無理だ」

「ゴーティングって……」

「なあ、教えるよう」

そう言つてイスをずらし、あたしにぴったり身を寄せてくる。思わず肩がびくんと震えた。その肩にぐいっと腕を回し、あたしの顔を覗き込んできた。まさかこんな場所で、本当にあたしの乳を揉むつもりじゃないだろうな。それでなくともあたしたち、ただでさえ目立つてはいるところの。

「分かつたわよ、言うから。正直に話すから恥ずかしい行為におよぶのだけは止めて」

「おーし、それじゃあきれこせつぱり自任じまえ」

「仕方がないので、あたしはほそつとつぶやくよう言つた。

「……足フュチ」

「はあ？」

「ヨウスケは、筋金入りの足フュチなんだつて」

がくっとヨウスケがずつこけるのが見えた。

「あと噛み癖があるから、えっちのときは気をつけろつて」

「お、おまえまさか……、それを信じたわけじゃねーだろうな」

「うん、極めて重要な情報として頭のなかにインプットした」

「インプットするなよー」

「あとね……」

「ええつ、まだあるのかよ？？。くそつ、あのお喋り女めえ」

狼狽するヨウスケの耳元に唇を寄せて、囁き声で言つた。

「……ヨウスケの魂は、もつどじょもないくらい、あたしに惚

れちゃつてるんだって」

言つてから、ちょっと恥ずかしくなつた。言われたヨウスケはもつと恥ずかしいに違ひない。しかし慌てふためくかと思いきや、ヨウスケはあたしの肩に回した腕にぐつと力をこめ、胸元へ抱き寄せた。そして、あつと思った瞬間には、あたしの頬にキスしていた。

「それ、事実だから？？」

あたしの脳内回路がフリーズした。再起動するまでには、少し時間がかかりそう。

……ほんと、男の子だったら良かつたのに。

つづく……。

メタモルフォーゼ

ああ、そうか、美少女ってのは男装するとそのまま美少年になつてしまふんだ……。

ヨウスケの涼しげな瞳に見つめられ、至極当たり前のことに改めて気づかされた、あたし。

なんか頭の中が、ぼわんとしちゃつてゐる。

アイルランドの哲学者、ジョージ・バークリーは言つた。
ど、あたしのクラスメイト、沙織は言つた。

存在することは知覚されることである、と……。

今やあたしの五感のすべては、この上もなくヨウスケを感じている。

ヨウスケの眩しさ、ヨウスケの匂い、ヨウスケの息づかい、ヨウスケの温もり……いや味覚だけはまだ試してないけど。でも、とにかくヨウスケは確かにここにいる。

あたしのすぐ目の前に存在してゐる。

そう、手を伸ばせばすぐに頬つぺたをむにゅつて出来そうなくらいの距離に。 。
むにゅ。

「痛へへへつ」

いきなりキスしてきやがつたお返しだ。あたしはヨウスケの両の頬を思いつきり指でつまんで引つぱってやつた。

「ほまえつてやふは、ふおんと、なにひゅるんらいおー」

涙目になつてあたしの攻撃から逃れようとするヨウスケ。でもまだ許してやんない。うーむ、横に広げてみてもやはり美少年は美少年のままか……。しかばば今度は縦につ。むにゅーつ。

「ひーかへんに、ひやめれつ！」

やつとの思いであたしの手を振り払い歯医者さんにさえ見せたこのなにような無防備で面白い顔から解放されたヨウスケは、その

ままがたがたとイスをすらしテーブルを隔ててあたしの真向かいに移動した。うん、これでようやく元の位置に戻った。

「皿邊じゅねーけど、俺様のファーネイスは小顔なことで通つてんだよ。それを広げてどうすんだ、広げて！」

「なによ、口を広げておせんべい食べやすくしてあげたんじやない」

「おめー、そーゆー生意気な口ばつかきてつと……」

両手を皿の前にかざして、口を大きく開いていた。いやらしい動きをして見せる。

「また、おつぱい揉んじゃうぞ」

そう言って、にやり、攻撃的な笑みを浮かべた。でも頬つべたが赤く腫れているので、ぜんぜん迫力がない。あたしはテーブルに頬づえをついて斜め約十五度の視線で見上げながら、ふつとヒルな笑みを浮かべてやつた。

「まつこと、子どもよのう……」

「あ、なんだよー、そのひとを蔑むよつな視線はよ。わいせつあんなに良い雰囲気だつたのに、なんかもつ台無しじゅねえか」

「ふふ、女心を解せぬとは、そちもまことに哀れなやつよのう……」

「ほ……と、わざとらしくため息をつく。それを見てワクスケは、はつとなにかを悟つたような顔をした。

「もしかして……」れがあの、世に名高いシンデレラとゆーやつが……

…

ひらひら、シンデレをそんな幻の逸品みたいに言つた。しかしヨウスケは感慨深げに何度もうなずきながら、シンデレとこう言葉をくり返し口のなかで噛みしめた。

「そつかあ……、これがシンデレかあ……。嫌よ嫌よも好きのうつ」とこつ、あのシンデレなのかあ……

「こや、ちょっと違うかも」

「よいではないか、よいではないか、と帶を引っ張られて、あーれー、とくるくる回る、あのシンデレなのかあ……」

「それ絶対、違うと思つ」

「今つ、巫女さんや口ボツ娘とならんで、俺様の萌え属性にシンデレラが加味されたのだった！」

レカ加味されたのだった！

から加わんのよ」

「こやせ、おめでといかくす……」

ヨウスケが、可憐らしく頬をふうりと膨らませる。——「ううう仕草

「ヤマジドウガーデン」

「これはつまらへりきり言われちやうと身も蓋もないところか、もう突っ込みのしようがない。」

えーと

「書いたくはど足ハニサとか關係ねーからな」「

やないもん

いや俺が足りて囁みぐせあるてゆーのは事実なんだけど

۱۱۷

「ああ、なるほどね……」

あ、レクター博士があまえは

「安心しろ、歯むといつても甘歯みだ。まちがつてもおめーの可愛

「お前はまだ済んで、前髪を仕にかけられないで

前提に話してゐるじやん

まあ そんが! が! しなさんな! で ほら え え え え え

「食わないでかつー！」

と変な日本語を得意げに使いながら、あたしは本日二個目のチョコレートマフィンにかぶりついた。なんだか知らないけど、今日はやけにメラメラと食欲がわいてくる。ふつうメラメラとくれば鬪志

なんだけど、時としてあたしの場合は食欲がわいてくるのだ。

「おめーって、ほんとチョ「好きだよなあ、おめーとキスしたらきつと……」

「試してみる?」

「え、……いいの?」

「絶対だめ」

思いつきり、あつかんべーしてやつた。

駅前にある噴水の真つ白い水しぶきに、小さく虹がかかっている。照りつける日差しが、肌を刺すほどに眩しい。

横断歩道に絶え間なく流れる、通りやんせのメロディ。

信号が変わるたび吐き出される人、人、人……。

雑踏、

人いきれ、

なんの変哲もない、夏の入り口のある日曜の朝、氣急くて、ひたすらに暑い……。

あたしは空を見上げて、うーんと伸びをした。気持ちのよい青空がどこまでも続いている。

そのとき。

突如、あたしの耳に、ぱしんっ！ という明らかに人の頬を張るような痛々しい音が飛び込んできた。なんだろう、痴話ゲンカか？ しかし間をおかずして子どもが火の付いたように泣きはじめる。見ると、髪の毛を茶色く染めた若い男が、おそらくは自分の息子であろう三、四歳くらいの男の子を激しく折檻しているところだった。「さやーさやー泣くんじゃねえ、このくそガキがつ、てめーはいちいち痛い目に遭わねーと親の言つことも聞けねえのか！」

いい歳した大人が、まだ年端も行かない子どもに向かって、まるで喧嘩の相手にでも対するように大声で喚いている。

ひどいなあ、いくら自分の子どもだからって、あんな風に怒鳴りつけなくてもいいのに……。叱るなら、ちゃんと子どもにも分かるように、一体なにがいけなかつたのか、どこがどう悪くて叱られて

いるのかを理路整然と言つて聞かせなきや。ただイラついた感情のまま、あんな風に怒りだけをぶつけていたんじや、子どもだつて怖くて泣くばかりだし、どうして自分が叱られているのかさえも考える余裕がないだろうに……。

見ると同じテーブル席には、派手な格好をした若い母親らしき女も座つていた。子どもは、父親の剣幕に恐れをなし、必死になつてその母親に救いをもとめている。しかし彼女はまったく知らんぷりを決め込み、涼しい顔で食事を続けていた。

今どきの若い親つて、みんなああなのかなあ。なんか胸が痛むよなあ……。

ぱしん　　、また父親が平手で子どもの頬を張つた。小さな体がぐらりと揺らぐ。ひどい……。あたしは思わず目をつぶつてしまつた。いくら親だからって、あんな小さな子どもを何度も打つなんてあまりにもひどすぎる……。

と、急にヨウスケがすつと立ち上がる気配を感じ、あたしは驚いてその顔を見上げた。

「……ヨウスケ？」

瞬間、息を飲んだ。そして自分の目を疑つた。

え、この人だれだろう……？　ヨウスケに似てるけど、でもヨウスケじゃない。断じて違う。あたしの知つているヨウスケは、もつと可愛くて、眩しくて、自由気まま、かつこ良くて、たまには拗ねたりもするけどでも目の中のほうはいつも笑つて、あたしはそんなヨウスケのことが大好きで……。

でも、今日の前にいるヨウスケは、これまで見たこともない全く別のヨウスケだった。それは、初めて見るヨウスケの表情。人間つてこんなに怖い顔が出来るんだ……。

とくに目つきが恐ろしかつた。

暗い暗い海の底に棲む深海魚の、その何千年も昔に視力を失つてしまつた目玉のような、そんな一切の輝きを失つた目。でも、どうんと淀んだその目の奥底には、怒りとも悲しみともつかないどす黒

い感情が、まるで猛毒を煮詰めて凝縮したようなとんでもない濃度の悪意となつて満ちていた。

怖い……。

ヨウスケが怖い……。

ヨウスケの抱えているであろう秘密が怖い……。

ヨウスケの心のなかに巢食つているかもしない闇が怖い……。
そして、そんなヨウスケのことがすでに忘れられない存在となつてしまつていて、あたしの運命が怖い……。

「ど、どうしたのよ、トト……？」

言つた声が震えた。どうしてもふつうに声が出せなかつた。あたしが今、ヨウスケに対してもの上もなく恐怖を感じていてることが伝わつてしまつただろうか。

ねえ、お願ひ、もとに戻つて。わかつ今までの、かつて良くて変な冗談ばかり言つたヨウスケに戻つてよ……。

しかし、そんなあたしの心の声はどどかず、やがて彼は子どもが泣いているほうへ向かつて歩きはじめた。まるで見えない糸に手縲り寄せられるように……。

夏の初めの日曜日、弛緩した喧噪にみちるその風景のなかにあつて、ヨウスケの存在する空間だけが、その部分だけが凍り付いたようになんで、重く、冷たく歪んで見えた。

つづく……。

ぺこん（前書き）

もつ初雪はじゆきがちりりこしてゐるところに、夏なつとこのつ設定せきていで書かねばなら
ない。（涙）まあ遅筆おぞひなボクが悪いんだけど……。ふんだ。

駅に隣接する「パーティ」の屋上で、夏の上昇気流に弄ばれながらアドバルーンがゆらゆらと揺れている。

十時を過ぎたあたりから、また気温が上がり始めたみたい。

あたしはヨウスケの背中を小走りで追った。この子なにをする気だろう？ なんだか怖くて声を掛けられなかつた。でも放つてはおけない。ヨウスケの態度がおかしくなつたのは、おそらくあの若い父親のせいだ。幼い息子の頬を何度も張つた男。今も大きな声でなにか喚いている。近づくと、その男の顔が少し赤いようにも見えた。酔つているのかな……。

「いつまでも、ピーピー、ピーピー泣いてんじやねえ、ひとが見てんだろうがっ」

父親がどなる。

「「めんなさい」、「めんなさい」、「めんなさい」……」

子どもは、両手で目をこすりながら小さな肩を震わせて泣きじやくつた。

気がつくと、多くの視線がその若い父親のほうへと集まつていた。ある者は冷ややかに嘲笑し、またある者は鬱陶しそうに眉をひそめている。でも誰ひとり、面と向かつて意見する者はいなかつた。しよせんは、よその家庭の問題 赤の他人が口をさしさむ筋合いじゃないと思つてゐるのだ。

「まつたく、お前えみたいなどんくさいガキは、うちには要らねえな。いつそここに捨てていくから、だれかに拾つてもらえよ」

「「めんなさい」、「めんなさい」、「めんなさい」……」

蚊の鳴くような声で、男の子が何度もあやまる。いっぽう母親のほうは、まつたく我関せずといった感じで携帯電話でだれかと談笑していたが、ふと周囲の視線に気づき不機嫌な顔で電話機をとじた。

「ちょっとお、恥ずかしいからやめてくんない？ 人が見てるじゃ

ん。そういうことは家に帰つてからやつなよ、まったく親子揃つてバ力なんだから……」

「ほうれみろ、お前のせいで俺まで怒られちまつたじやねえか。いいか、家に帰つたら覚えておけよ」

薄笑いを浮かべて、父親が呑喝する。子どもはまたベソをかき始めた。

「ごめんなさい、『ごめんなさい』『ごめんなさい』……」

「だから、ピーピー泣くなつつてんだろが！」

赤らんだ顔を歪めて、その男はふたたび平手を振り上げた。子どもが縮こまつて、ぎゅっと目をつむる。あたしは思わず息を飲んだ。周りで見ていた大人たちのあいだにも緊張が走る。

「このガキつ！」

そのとき、節くれ立つた父親の腕にほつそりとした指がきつく巻きついた。ヨウスケだつた。子どもを折檻しようと父親が振り上げた腕を、ヨウスケが背後から掴んだのだ。腕を掴まれた父親は、慣性の法則で上体だけをかくんと動かしてから、驚いて後ろを振り返つた。

「なんだ、あんたは？」

ヨウスケは答えない。

「このやうう、その手を離せよ！」

父親は、ヨウスケの手を振り払おうと懸命にもがいた。悪趣味なタトゥーの入つた太い腕をめちゃくちゃに振り回す。しかし華奢でか細いはずのヨウスケの指は、その男の手首に食い込んだままなかなか離れなかつた。それどころか徐々に彼の腕をねじ上げてゆく。

「痛てててつ、おいこらやめねえか！」

語尾は悲鳴になつた。しかしそれを見ていた母親のほうがヒステリックにわめきだした。

「ちょっと何すんのさ、あんたいい加減にしないとひとを呼ぶよ。うちは子どもの躰には厳しいんだよ。他人の家庭の問題に、かつこうつけて横からしゃしゃり出てくるんじゃないよ、ちょーうざい、

胸くそ悪いんだよ」

まくしたてる母親に向かつて、ヨウスケが初めて口を開いた。しかしあの爽快だったハスキーボイスは驚くほどに弱々しくて、しかも涙声だった。

そう、ヨウスケは泣いていたのだ。

「……母さん、ぼく、あのおじさんのこと嫌いだよ。どうしておじさんは、ぼくのことぶつの? ぼく、なんにも悪いことしないのに。いつも良い子にしてるのに。おじさんは、どうしてぼくのこと蹴飛ばすの? ぼくが女の子みたいだから? それとも……ぼくがおじさんのこと、お父さんって呼ばないから?」

ぼそぼそと涙声で語るヨウスケに驚いて、その母親はあんぐりと口を開けた。

「あんた……なに言つてゐるの?」

野次馬たちも呆気にとられてゐる。ヨウスケは、父親の腕をひねり上げたまま、ひっくりくと泣きじゃくつていた。

「……ぼく毎日、母さんのことお手伝いしてゐよ、宿題もちゃんとやつてるし、この前だって算数のテストで百点取つたんだよ。なのにおじさんは、どうしてぼくに酷いことばかりするの?」

「ちよ、ちよとヨウスケ

ヨウスケは、あきらかに精神に変調をきたしてゐた。口を見開いたまま、涙をぼたぼたとこぼしてゐる。あたしは、恐る恐るその肩を揺すつてみた。

「ねえ、ヨウスケつてば、一体どうしちやつたのよ?」

反応はなかつた。まるで人形みたいに、ただあたしに揺すられるがままになつてゐる。母親に向けられた目もなんだか虚ろで、焦点は合つていないうに見えた。

「……もうすぐ学校のプール開きだよ。でもぼく恥ずかしくてみんなの前で服を脱げないよ。お願ひだから、もつベルトをムチの代わりに使うのはやめさせて、ぼくの体にたばこの火を押しつけるのはやめさせてよ。痛いのはやだよ、熱いのもやだよ。お願ひだから、

お願ひだから

ヨウスケに腕をねじ上げられたままの父親が、顔を歪めながら悪

態をついた。

「おい、ねえちゃん。お前の彼氏は頭が狂つてるんじゃないのか？」「いぬわい、バカつ、元はと言えば、ぜーんぶあんたのせいなんだから。

「ちょっとお客さん、なにやつてるんですか？」

騒ぎを聞きつけて男性店員が一人、こちらに向かって駆け寄つてきた。それを見た母親が、ここぞとばかりにまくし立てる。

「こいつなんとかしてくだれーー、こきなりやつて来てひとに暴力を振るうんですよ」

あたしは、あわてて弁解した。

「あ、あの、違うんです。ヨウスケは、小さな子どもがひどい折檻を受けているのを黙つて見ていられなくて……」

「なにが折檻よ！ 粗相をした子どもをひょいと叱つていただけじゃない」

「でも、あんな小さな子どもを何度も引っぱたくなんて」「店員が割つて入つた。

「まあまあ、ちょっと落ち着いてください」「

そのとき、ヨウスケが急にあたしに言つた。

「おい、ぬみ子つ、その子のシャツの袖まつへつてみろよ」「えつ？」

ヨウスケはいつの間にか泣き止んでいて、目をまつ赤に腫らしながら、すごく怖い顔をしていた。

「早くやれつてばー！」

「は、はい」

すごい剣幕だった。なによ、いきなり亭主関白？ でもなんだか怖くて逆らえなかつた。あたしは、ためらいながらも泣いている子どもに近づいた。

「ねえボク、ちょっとじめんね」

小さな腕をそつと掴む。子ビもは一瞬びくつと肩を震わせたが、あたしが優しく笑いかけると、されるがままになっていた。それでも、このくそ暑いのにロングスリーブのシャツだなんて……。

「あっ！」

コットンシャツの袖をまくら上げた瞬間、あたしは小さく叫んでしまった。周りで見ていた他の客たちのあいだからも悲鳴が上がる。その子の細い腕には、びつしりと火傷のあとがあつたのだ。明らかに、たばこの火を押しつけたあとだつた。一人の店員が、信じられないといつたふうに若い母親のほうを見た。

「あ、あんた……」

母親は蒼白な顔で立ち上がりと、子ビもの手を引いて出口のほうへ歩きだした。

「なによこの店、ちょ一むかつく。もう一度と来ないからつー！」

母親に連れてゆかれる瞬間、子ビもの小さな手があたしのスカートの端を掴んだ。

「あ……」

白くて短い指は、しかしさカートの布地をすりぬけて、そのまま遠ざかつていつた。あたしはなんだか胸が締め付けられる思いで、その憐れな後姿を見送つた。

そう言えばいつだつたか、看護師志望の愛子がこんなことを言つていた。

生まれたばかりの赤ちゃんは、まだ自分と母親との区別がつかず二者は統一体だと思っている。つまり母親のことを自分の体の一部だと思っているのだ。だから自分のそばから母親がいなくなると不安になつて泣きだす。近くにいるときは、手で触れたり口で吸つたりしてその存在を確かめ安心する。そうしながら成長してゆくにつれて、自分が母親とは別の独立した存在であることを徐々に認識し、やがて自我を形成してゆくのだ。

でもネグレクトのような育児放棄によつてごく幼いうちに母親から遠ざけられてしまつた赤ちゃんは、その安心が得られず成長して

からも自我の確立が不完全なままのことが多い。いつまでたってもオムツが取れなかつたり、指をしゃぶるクセが抜けなかつたり、ヌイグルミを抱いていないと不安で眠れなかつたりするのは、その兆候なのだという。

幼いころに重大な愛情剥奪の経験をしてしまつた子どもは、つねに不安でたまらない……虐待を受けている子どもたちは、いつだつて愛情に飢えているのだ。

さつき、あたしのスカートの裾を掴もうとした小さな手……。あの手は、本当はなにを掴みたかったのだろう。

気がつくと、父親のほうもヨウスケから逃れ、母親のあとを追つて店を出でた。すでに店員も去つた後で、野次馬たちも興味を失つてもうこちらには目を向けていなかつた。ただヨウスケだけが、魂が抜けたみたいになつて突つ立っていた。

「あたしたちも、ここを出ましょう」

あたしは、ヨウスケの手を引いて店を出た。けつぎょく今日もヨウスケにおじつてもらひことは出来なかつた。でもそんなことは、もうじうだつていい。あたしはヨウスケのことが心配だつた。この子はきっと、心にもの凄く深い傷を負つてゐる。なにも喋らざつつむいたままのヨウスケとならんで駅前の通りを少し歩いた。しばらく行くと小さな公園があつたので、そこのベンチに一人して腰を下ろした。そのとたん、ヨウスケが急にあたしの腰に抱きついてきた。

「きやあつ！」

こんなところで白昼堂々と押し倒してくる氣があ？ 頭を小突いてやううと振り上げた手を、あたしは止めた。ヨウスケは泣いていた。あたしのスカートに顔を埋めたまま、肩を震わせ、まるで小さな子どもみたいに……。

あたしは、そんなヨウスケをそつと抱きしめ優しく頭をなでてやつた。

「……いいよ、ずっとこのまま泣いててもいいよ、あたしはずつといこにいるから、ヨウスケのそばにいるから」

ミウスケはなにも答えず、あたしのおーるーのミースカートを涙と鼻水とよだれでびちょびちょにしながら、ただ泣きじゃくっていた。

つづく
。

恋心ひりめり（恋戀めり）

ふつか——つー。連載を再開させていただきます
m（——）

女心と、なんとや、ひ……。

あたしのスカートに顔を埋めて泣きじゃくっていたヨウスケは、ほどなくしてまるで何ごともなかつたかのよつに完璧に立ち直つた。なんのよ、この回復の早さは？　しかも顔を上げる瞬間、あたしのおニユーのスカートで、ちーんと鼻をかみやがつた。

「い、い、い、このおバカーつ！」

ぽかりと頭を叩いてやつた。

「痛てつ」

駅から二町ほど離れたところにあるその公園は、十八階建ての分譲マンションとコモリユーティセンターの立体駐車場とにはさまれた、わずかなすき間にあつた。遊具はブランコと鉄棒があるだけの小さな公園。でも、そびえ立つ建物や植樹されたプラタナスの枝葉に陽が遮られて、とても涼しかつた。

あたしはヨウスケの顔を覗き込んだ。

髪型……ちょっと乱れてるけど、さらさらしてて綺麗。

瞳……まだ少し赤いけど、きらきら澄んでいて素敵。

チーク……心なしかふくれつ面だけど、つるふわで可愛い。

リップ……泣いていたせいかつやつや光つてて、美味しそう。

うん、いつものH口かつこいいヨウスケの顔だ。

安心してうんうんうなずいていると、その一瞬のスキをついてヨウスケがあたしの唇をうばつた。ただしほんの一瞬、一秒の十分のくらいのあいだ唇どしづが、ちゅつて触れ合つただけ。でも、あたしはまつ赤になつて怒つた。

「てめー、いらヨウスケ、今日はやりたい放題かよ？」

するとヨウスケは情けない顔になつて「そんなに怒るなよー」と言った。

「……なんか、またおめーに色々と迷惑かけちまつたようだな」

「ううん、そんなことない」

あたしは、ゆっくりとがぶりを振った。自分はヨウスケの全てを知りたい。可愛らしさや格好良さだけじゃなくて、心に抱えている悩みや過去に負わされた傷、そんな闇の部分からみーんな含めてヨウスケという人間の全てが知りたい。大勢のひとが見てる前でみんなにも無邪気に泣いたヨウスケ。その十数年歩んできた人生の裏側には、いつたいどんなストーリーが隠されているのだろう……。

「今日は、ヨウスケのセンシティブな精神世界の一端をのぞき見ることができ、すごく新鮮な驚きを味わえたよ」

「ふつふつふ、なに言ってやがる。あれしきのことで俺様のキャラを知つたつもりになるなんて十年早いぜ。自分で言うのもなんだが、俺つて人間は全くつかみ所がねえ」

「ほんと、自分で言うことじゃないわね」

スカートについた鼻水やよだれをハンカチで拭き取りながら、ふうとため息をついてみる。今日は色々あつたけど、ヨウスケのことがますます分からなくなつて、そしてますます好きになつた。こんな変なやつに心惹かれてしまつて、あたしの人生この先いつたいどうなつてゆくんだろう。つてゆーか、そもそもこいつ女の子だし……。

不意にあたしの耳に、ぽんっという小気味よい音が飛び込んできた。見ると、公園のすみで小さな男の子が父親とキャッチボールを始めていた。まだ買つてもらつたばかりのグローブは小さな手にはぶかぶかで、日を浴びてきれいなオレンジ色に輝いて見えた。父親が腰を屈め、キャッチチャーの真似をしてミットをかまえる。そのミットに向かつて、男の子が大げさなフォームで右手を振りかぶる。二人のあいだを、芝生すれすれの高さでつがいのモンシロチョウがひらひら横切つてゆく。男の子がボールを投げた。今度は大暴投だった。しかし父親はぴょーんとジャンプして、頭のはるか上に飛んできたボールを難なくキャッチした。それを見た男の子は、手を打つて大はしゃぎをしている……。

ヨウスケがぽつりと呟いた。

「父親つていうのはよつ、きつと子どもがまず最初に憧れるべき存在なんだろうな」

「え？」

ヨウスケの横顔を見た。ベンチの背もたれに体をあずけ、青一色で塗られた夏空をぼんやり見上げるその目は、しかしどこか遠い別の世界の景色を眺めているように感じられた。

「ガキのころにさ……、親父に肩車してもらうのがすんごく好きで、いつも出掛けたびに、かたぐるまー、かたぐるまー、ってせがんでたんだ。親父の肩の上から見下ろす眺めって最高なんだぜ。子どもの視線より何倍も高い位置にあるから、ふだん見慣れてるはずの景色がぜんぜん別の世界に見えてさ。なんだか急に自分がエラくなつたような気になつて、それがもう嬉しくて嬉しくて……」

「うんうん。分かるなあ、その気持ち」

「俺が小学校へ上がる前に死んじまつたから顔とかはよく覚えてないんだけど、その肩に乗せてもらつた記憶だけは今でもはつきり残つてるんだ」

「そうか、ヨウスケには父親がいなかつたんだ……。

あたしは、もう一度キヤツチボールをしている親子のほうへ視線を戻した。子どもの嬌声と父親の笑顔。日を浴びて輝く真新しいグローブ。風のない夏空を行き交う白いボール。ひらひら舞うモンシリョウ。降りそそぐ蝉の声。

絵に描いたように平和で幸福そうな親子のすがたを見ていて、あたしはふと、あのカフェで泣いていた男の子のことを思い出してしまつた。

「……やつきの子。家へ帰つてからも同じように親に叱られるているのかな」

言つてから「しまつた」と思った。もう触れないでおこうと思つていた話題なのに、目の前の幸せそうな親子を見ていたら自然と口をついて出でてしまったのだ。恐る恐るヨウスケの横顔をうががう。

先ほどの変貌ぶりを思い出して、ドキドキした。でも、ヨウスケはもう泣いたり怒つたりはしなかった。ただ少し寂しそうにうつむいて、「さあ、どうかな……」とつぶやいただけだった。

そのとき、不意にあたしの携帯電話が鳴った。

「あ、ゆみ子ー。今日の約束、忘れないでよ。あたしたち、先に店に入つて待つてるからさ」

沙織からの確認の電話だった。今田のお屋に、あたしは沙織の彼氏であるケンジの紹介で、ある男の子と会う約束をしている。有名な進学校でサッカー部のキャプテンをやっているイケメン男子という触れ込みだったので、昨夜はもう浮かれっぱなしでよく眠れなかつた。今朝、家を出たときだつて恋のボルテージはもうマックス状態だつた。でも今はヨウスケのことが心配で、すっかり気持ちが萎れてしまつている。

卷之二

「あれれ？ ゆみ子つてば、なんだかテンション低いよ、どうしたの？ ひょつとしてアレ始まっちゃった、とか？」

「ば、ばか、そんなんじゃないわよ」

「遅れないで来てよ」

電話を切つてから、気付かれないようにしてミカスケを盗み見る。どうしよう……。今日は、このままでミカスケのそばにいてあげたいな。沙織には悪いけどデートすっぽかしちゃおうかな。ごめん、フライドチキン食べたらとつぜん鳥インフルエンザに感染しちゃって、とかなんとか嘘をついて……。

しかし、そんなあたしの心情を察してか、目の前にいる美少年は
いや本当は美少女なんだけど、一向に顔も向かないままいつ言つ
た。

「行けば？」
「これからデートなんだろ？」

やばい、完全に見透かされてる。つてか、なによ、その投げやり

な言いかたは。

「うん、でも……、体の具合が悪いからって断つちゃおうかなって思つてるの。だつてヨウスケのこと、ひとりにしておくの心配だし」「ばーか、無理すんなって。楽しみにしてたんだろ、今日のデート」めかし込んだあたしの姿を頭のてっぺんから足の先まで眺め回して、ヨウスケがにやけた笑いを浮かべる。急に恥ずかしくなつて、あたしは顔を赤くしながらうろたえた。

「べ、べつに無理なんかしてないもん」

「やうかなあ……。でもこんなに可愛い子に迫られたんじゃ、相手の男、きっとイチコロだろうな。うひひ」

「もう、ばか」

あたしが怒ると、ヨウスケは少し真面目な顔になつて言つた。

「いや冗談抜きでさ、俺もこの後ちょっと用事があるから、俺たち」

「」

のろのろとベンチから立ち上がると、ヨウスケは空を仰いで、うーんと大きく伸びをした。あたしは少し拍子抜けして、がっくり肩を落とした。「うえーん、ゆみ子、行かないでーっ」と泣いてすがりついてくるまではいかないにしても、このまま一緒にいたいなんて言つたらきっと喜んでくれるかなつて思つていたのに……。

「ほんとにはいの？ あたし行っちゃうよ……」

「おう、行つてらっしゃい！ デートがんばってな」

ばしんっ。ヨウスケが勢いよくあたしの背中を叩いた。おつとつと、反動で、よろめぐ。このやうに、今の一撃、なんだか悪意がこもつてなかつたかあ……。

「じゃ、行くね。今夜にでもまた電話するから」

「のりけ話なら聞きたくないぜ」

「ヨウスケのばかっ！」

あたしは肩をいからせ、ふりふり怒りながら駅へと歩き出した。きっとヨウスケは、氣を使ってわざと冷たい態度を取つているんだと思つ。そんなことは分かつてゐる。心の片隅ではそのことをちゃんと

と理解してゐるんだけど、でも乙女心って複雑、こうこうの場合どうし
たつてツンケンしてしまつ。ごめんね、ヨウスケ。

通りを渡る押しボタン式の信号機の手前で、もう一度公園のほう
を振り返つてみた。でもそこからじや、もうヨウスケのきれいなシ
ヨートヘアもまぶしい笑顔も見ることはできなかつた……。

つづく……。

#いつねも登場？（前書き）

更新が遅くなっていますが、でも頑張つて連載しておきますので今年もどうぞよろしくお願いします。

m（—）m

沙織たちと待ち合わせをしたカフェは、線路をへだてて駅の裏側にあつた。ガード下をくぐつて、雑居ビルにはさまれた薄暗い路地を抜けた先のどんづまり。そこに優雅にたたずむ、小綺麗な木造の一階建て。

よくギリシャのクレタ島あたりを背景にして撮つたスナップ写真なんかに、こんな感じのお店が写りこんでいる。お洒落で、しかも風格のあるカフェテリア。象牙色に塗られたしつくいの壁に、派手な色彩をつらねたサンショードが垂れ下がつていて。料理はアメリカンフードがメインだけど、すごく美味しいしボリュームだつてある。ちなみに、あたしのおすすめメニューは、バジルとアンチョビのピッツア、それに、はちみつをたっぷりと使つたパンプキンパイ。駅裏の街並つていうのは、もともとくすんで色あせていた。時流に乗つかつてそれなりに栄えた駅前の繁華街にくらべて、取り残され、拗ねてしまつた感じのする古くさい喫みが根付いていた。飲食店はいわゆる飲み屋ばかり。商店だつて「今さらコンビニへんぞ転身できるかい」みたいな、やや開き直つた感のある時代遅れしたお店がほとんどだつた。

見捨てられ、風化した街。

薄暗くてじめついた、胡乱な空間。

とてもじゃないけど、花も恥じらう女子高生には似つかわしくない場所だつた。

でもここ数年のあいだに、この寂れた街にも少しずつ変化があらわれはじめたみたい。古ぼけた建物のあい間あい間に、若者むけのお洒落なお店がぽつりぽつりと顔を見せはじめたのだ。しかも健全で品行方正な表通りではあまり見かけないような、わりとマニアックな店が多かつたりする。

インディーズ専門のCDショップ、個人輸入のアジアン雑貨店、

タトウーやボディピアスの専門店、ゴスロリファッショングループティック、はてはレイヤー御用達のウイッグ専門店まである。

老いて色あせた街は、いつしか若者たちの物欲と好奇心をそそるお洒落でスタイルッシュな空間へと変わりはじめた。しかも、ちょっぴリアンダーグラウンドな香りただよう、秘密基地めいた遊び場だ。その注目スポットのなかでも特にあたしたちのお気に入りがこのお店、今日沙織たちと待ち合わせしているカフュ・ブラックローズなのだ。ウッドデッキに設けられたテラス席には、色とりどりの鉢植えのバラが甘い芳香を放ちながら、まるでクリスマスケーキのデコレーションみたいに綺麗に並べられている。

『ウスケと別れたあたしは、表通りの人ごみを早足にすり抜け、ティッシュ配りのおねえさんや街頭アンケートのおにいさんたちを巧みにかわしながら、なんとか約束の時間までに待ち合わせ場所へとたどり着いた。途中、ガード下をゆく自転車のお年寄りとあやうく激突しそうになつたことは、このさい秘密にしておく。腕時計を見ると、きつかり一分前、すべり込みセーフってところ。

少し重たいかしの木の扉を両手でぐいっと押し開けると、頭のうえで、ガラ「コロ」と景気よくカウベルが鳴った。同時に、チエダーチーズやらデミグラスソースなどの美味しそうな匂いが一斉にただよってきて、あたしのお腹が、さつき食べたばかりのチョコレートマフィンをえいっどこかへ押しやつた。いつでも好きなだけ食べられますぜえ、旦那。って感じ。

日曜のお昼どきとあって、さすがに店内は混み合っていた。でもそこは優等生の沙織のこと、万事手ぬかりはない。ちゃんと窓際のいちばん見晴らしの良いテーブル席をゲットしていく、あたしが店へ入るなり立ち上がって手招きした。

「ゆみ子ー、こっちこっち

「ごめーん、あたしひてば時間ぎりぎりー

「やつとシンデレラのお出ましか

「この暑さで、かぼちゃの馬車がエンジン火いちゃつて

「そりが、じゃあ今度からハイブリッドにしろよ」

ケンジが「よつ」と片手をあげた。相変わらず安っぽい金メッシュのネックレスに、ラメ入りてらつてらのスカジャンを腕まくりして着ている。背中んこには金糸で「JAPAN」なんて、でかでかと刺繡されてる。まじ、このファッションセンスにだけは付いていけない。つてか沙織、なんでこんなに軽くて薄つペラなやつと付き合つてるんだろ……？ 男と女の仲つて、ほんと不思議。

「なんだゆみ子、今日はバツチリめかし込んでるじゃん」

「ちいーっす。てか、あんたどこの組のチンピラよ？」

「あ、ひでーな。彼氏のいないお前のために骨を折つてお見合いのお膳立てしてやつたの、このケンジさまなんだぜ」

「はいはい、感謝しますつて。……それより肝心の、あたしの王子様はどこ？」

「それが、まだ来てないのよねー」

沙織が、七宝焼みたいにこつてりと色彩の乗つた爪で携帯電話をつかみあげると、ぱちん、ディスプレイを開いて時刻を睨み上げた。

「もう来てもいいころなんだけど……」

どうやら相手の男の子は少し遅れてるみたい。こんなことなら、急いで来ることなかつたな。

「いらっしゃいませ、お決まりですか？」

黄色いショックがらのエプロンをしたウェイトレスが注文を取りにやつて来た。うーむ、どうしようかなあ、ここでばくばく食べたはしたないかな。相手の男の子に、なんて食いしん坊なやつなんだつて嫌われちゃうだろうか……。メニューを睨みながら、うむむむと唸つていたら、そんなあたしをあざ笑うかのようにお腹がぎゅるるーっと鳴つた。

「だめだあ、女の子はぜつたに食欲には勝てない。」

人間の二大本能であるところの食欲と性欲のうち、どちらか一方だけを満たすことができるとしたら、そう究極の選択を迫られたら、ほとんど全ての女の子が食欲のほうを選ぶだろう。女の子というの

はそういう生き物だ、けっきょく食べる欲求にはあらがえない宿命を背負つていいのだ。

などと自分自身に苦しい言い訳をしておいて、あたしはこの際がつつい食事することで腹をくくつた。

「えっとねえ……、じゃあグリルド・チキンとマッシュルームのサンドイッチに、ほうれん草のクリームパスタ、それとシーザーサラダに、あとストロベリーチーズケーキもください。あ、全部一緒に持ってきてかまわないですから。それとアイスココアもお願いします」

「アホか、あんたは」

沙織が、呆れ顔で言った。

「これからアートするつていうのに、そんなにたくさん食べてどうすんのよ」

「だつて……」

「だつてじゃないでしょ、あんたのためにこつちだつて貴重な時間さいで来てんだから、少しさは真面目にやつてよね」

「でもほら、腹が減つてはいくさはできないって、むかしの偉い人も言つたじやない。だれの言葉だつけ？ エットと織田信長？ あれ、違つたかな、坂本龍馬？」

「どつちも言わない。つてかあんた、いつたいだれと戦つ氣してんのよ？」

「沙織いー、あたしひもじいようー」

そう情けない顔で取りすがると、彼女は脱力して深いため息で肩を上下させた。

「もうー、肉圧でスカートのボタン、ぴーんと弾け飛んだつて知らなかからね」

「そんな恥ずかしいことにはならないもん、あたしスレンダーだもん」

そのとき、沙織の向かいで赤の他人を決め込んで窓の外をながめていたケンジが「おー」と弾んだ声を出した。

「来たよ、来た来た、よつやく色駄の「」到着だぜつ」

ガランゴロン。

扉が開く。

逆光でまだ顔はよく見えないけど、店の入り口にすらりと背の高いシルエットが浮かび上がった。あのひとが大高サッカー部のキャプテン、ケンジの中学校時代の同級生、そしてあたしの王子様……。

「いらっしゃいませ」

歩み寄るウェイトレスを手で制しておいて、そのひとは「」、三歩店のなかへ踏み出したところで立ち止まった。どうやら、あたしたちのことを懸命に探してゐみたい。

「おーいっ、高木ーー、こつちだぞお、こつちこつち」

ケンジが中腰になつて手を振ると、その高木くんも、ひらりと片手を上げて応えた。うん、身のこなしがとっても爽やか。さすがスポートマンつて感じだね。彼は、あたしたちを見つけると嬉しそうに微笑みながら早足に近づいてきた。

「やあ、じめんごめん」

やばい、まじ格好いい。

彼の姿がだんだん近づいてくるにつれ、あたしの胸はときめいた。思つてたとおり、いや思つてた以上に、めちゃ、まじで格好いい。部活やつてるひとつてみんなボーズ頭なのがなつて思つてたけど、彼の頭は茶色く染めたショートヘアだった。おまけにピアスまでしている。顔は日に焼けて少し黒いけど、でも目鼻立ちがすつきりと整つて肌もきれい。もし今どきの標準的なイケメンの顔をモンタージュ写真で作成したら、きっとこういう感じになるだろうな。こんな格好いいひとと手をつないで街中を歩いたりしたら、きっと道行く女性はみんなジョラシーのこもつた熱い眼差しで振り返ることでしょう……。

「遅れてもうしわけない。じつは知り合いで車で送つてもらおうとしたら、この暑さでエンジンがオーバーヒートしちゃつてさ……」

うふふ、あたしと同じこと言つてる。

立ち上がりてあいさつしようが、ケンジが紹介してくれるまで大人しく待つていようかと悩んでいると、彼は爽やかな笑顔を浮かべたままで、あたしのすぐそばまで歩み寄ってきた。

「やあ

「……ど、どうもでしたあ

びっくりして身を固くしていると、彼は身をかがめてすーっと顔を近づけてきた。あわわわ、もう心臓ばくんばくん、突然の出来ごとにまるで金縛りにあつたみたいに動けなくなる。彼の体からはムスク系の少しぇつちな香りがした。ちょっと近いです、近いですつてば。

彼がじくじく自然な動作であたしの背中へ手を回していく。

な、なにをなさるおつもりでしょう。まさか西洋風のあいさつとか……？ 肩を抱き合つて、ちゅうとかじゅうやつ？ ま、まよい、ナイフとフォークさえ上手に使えないあたしに、とてもじやないけど西洋風の洒落たあいさつなんて無理。そう思つて身じろぎすらできずにはついていたら、彼はあたしの背中からなにかをペリッとほき取つた。

くつ？

「ははは、君つて面白いね。これをずーっと背中にくつ付けたまま、この店にいたのかい？」

ひらひら。

彼の手が、ハガキ大のメモ用紙らしきものをつまんでいた。

そ、それつて……、まさか今の今まで、ずっとあたしの背中に貼り付いてたの？ ウソでしょーーー！ あたしは半分パニックになりながらも、素早くその紙に書かれている文字に目を走らせた。そこには赤いマジックペンで、はつきりくつきりこう書かれていた。

わたし二股かけてます

あたしは、さーっと青くなり、次の瞬間には、ゆでダコみたいにまつ赤になつた。

「よつ、よつ、よおおおすけええええーーー！」

○...うるく

ねじれが登場へ（後書き）

今年がんばるよ。……めんどくさー（←）

やだもつ、高木くんって素敵！

ヨウスケなんてもう知らない！

一生口きいてやるもんか、あの、おたんこなすの、あんほんたん、もつ、ばかばかばかつ。

あたしは顔から火のでる思いで、身をすくめて縮こまつた。どうしよう……。高木くん、せつとあたしのこと軽薄で尻の軽い女だつて思つてるだらうな。当然だよね、二股だもんね、彼からしてみれば「お前いったい、なに様のつもりよ?」って感じだよね、もうありえないよね、とんこつ醤油味のチーズケーキくらいありえないよね。ああ、へこむなあ……、この一週間ずっと思い焦がれてきた、ときめきの出会いのシーンが結局これだもんな。まじ喜劇だよね、笑っちゃうよね……。ヨウスケめ、おぼえてろよー、近いうちに必ずお仕置きしてやるからな、いじめてやる、泣かしてやるんだから……。

あたしはヨウスケの心ないイタズラに内心憤慨しながらも、なんとかしてこの場を取り繕わなきやいけない必要にせまられ、おそるおそる高木くんの顔を見上げてみた。

「あ、あの……」

ところが慈悲深い彼は、あたしがなにか口にする前に、爽やかな笑みを浮かべてこう言つた。

「はははっ、ひどいことをするやつがいるもんだなあ。」(「)の愉快犯つていうんだる? 無作為に選んだ女の子に狙いすましてイタズラをしかける。こんなことして喜ぶなんて、ほんと最低のやつだと思つよ」

うんうん最低、ヨウスケなんてもう最低のお子ちゃま低能少女。それに引き換え、あたしの王子様つてすごく大人、まじ優しくつてもう感動しちやう。だってこの告発文を、根も葉もない場当たり的な犯行として、一笑に付してくれたんだもの。つまりは、あたしの

ことを信じてくれたつてこと。こんなに純真無垢で可憐な美少女が二股なんてかけるわけないじゃん、わはははは、片腹痛いぜ！ みたいな。

あたしはもう嬉しくって、この背の高い、イケメンの、優等生の、お金持ちのボンボンの、サッカー部のキャプテンのことが、ますます好きになつた。……高木くんつて、ほんと素敵。

「それにしても外は暑いなあ、俺こんなもん着てくるんじゃなかつたよ」

彼は、Tシャツのうえにライトグレーの薄手のパークーをはおつていた。たしかに今日みたい、ぎんぎらぎんのお天氣にはタンクトップ一枚着てればじゅうぶん、もしここが街中でなくて例えば友だちん家庭先とかだつたりしたら、海パンに麦わら帽だつてぜんぜんオッケーなくらいだ。

彼はじんわりと汗のにじんだそのパークーを、鬱陶しそうに脱ぎはじめた。でも動きがなんだか不自然。左手はだらんと下げたままで、右手だけを窮屈そうに動かしてパークーの袖から腕を抜こうとしている。

「なんだ高木、お前その手どうしたんだよ？」

ケンジがのんきな声を出した。見ると、高木くんの左手は、手首から先が包帯でぐるぐる巻きにされていた。

「ああ、これが……。じつは練習試合でシュート受けそこねちまつてさ。たんなる突き指だと思つてたんだけど、医者行つて診てもらつたら、もろ骨折してて……。参るよなあ、本当のこと言つと昨日ようやくギブスが取れたばかりなんだ」

「うわ、それは大変だつたな。考えてみりや、ゴールキーパーつてちょ一危険なポジションだもんな。俺『少林サッカー』観てて、つづくそう思つたよ」

「ははは、あれは映画のはなし。けどまあ、危険なポジションつてのはその通りなんだ。敵の打ち込んでくるシュートを身を挺して阻止しないといけないからね。他の選手よりケガが多いのは致しかた

ない。俺も練習試合ではなんとか相手のショートをはじいて僅差を守り抜いたんだけど、おかげで結局このざま。もつインターハイ出場はあきらめてるんだ」

ちょっと淋しそうに微笑んで、高木くんはため息をついた。そうか、彼ケガしてたんだ。そうだよね、じゃなかつたら今ごろインターハイへ向けて猛練習中のはずだもんね。女の子と遊んでるヒマなんてないよね。

なんだか、ちりつと胸が痛んだ。高木くんサッカー出来なくて可哀想……。ややぎこちない動きであたしの真向かいに腰をおろす彼を上目づかいに盗み見ると、ちょうどむこうもあたしのことを見ていて、ばっかり目が合ってしまった。どきっとした。お互いの視線が瞬時にからみ合い、加熱してばちばちっとまばゆいスパークが散った。彼の瞳の奥には、なんだか無数の星が瞬いでいるように見えた。一方、あたしの目からはラブコメの「ミックみたにハートマークがびよーんとせり出した。くらりと目眩を感じ、あたしはそのまま俯いてしまった。やばつ、ラブエナジー強烈すぎで、早くも恋の防御シールドを突破されたもよう。

それから少しのあいだ妙な間があつて、その沈黙にいたたまれなくなつたあたしが捨て身のギャグを飛ばして場の雰囲気をなごませようかと覚悟を決めたとき、沙織がパンプスの先でケンジのすねを蹴つた。のんきにストローの先をくわえてアイスコーヒーをすすつていた彼は、げほっと咽せたあと彼女の顔を見て一回瞬きした。

ケンジ（はい？）

沙織（ちょっと、ぼけーっとコーヒー飲んでないで、彼にゆみ子のこと紹介してあげなさいよ）

ケンジ（あ、悪い悪い、すっかり忘れてた。そういうえば、こいつら初対面だつたもんな）

沙織（当つたりまえでしょ。ほら見なさいよ、一人とも気まずくて黙りこんでるじゃないよ。まったく気が利かないんだから）

ケンジ（わーつたよ、今紹介するから、そうほんほん言うなつて）

一瞬のあいだに田と田でそんなやり取りを交わしてから、二人はあたしたちのほうへ向き直つて、えへへーと愛想笑いを浮かべた。

そのあとケンジがおもむろに咳払いして高木くんに言った。

「あー、一応紹介しておくよ。この子が電話で話してた、井上ゆみ子ちゃん。沙織のクラスメイトで、俺もけつこうやき合いで古いんだ。見てのとおりルックスはまあまあだし、話とかもけつこう面白いけど、なにせ気は強いわ、食い意地ははつてるわ、男まさりにバイクは乗り回すわ、なんでもすぐ首突つ込みたがる厄介な性格してるわで、いやもつ……」

あたしはお行儀よくすすつていたアイスココアをあやうく吹き出しがけた。てめー、ふざけたこと言つてんなよ!!。沙織が再びヒールの先でケンジのすねを蹴る。

「あ痛てつ、……いやなんつーか、その、とにかく根はとても良い子なんだ。だからまあ、つき合つてみて損はねーと思つぜ、ははは……」

アホかい。あたしは再びまつ赤になつた。なんて紹介のしかたしてくれるんのよ、この軽薄チンピラ男は。こいつの空っぽの頭かち割つて脳みその代わりにプリンアラモードでも詰めてやりたい。そんな衝動にかられたけど、今はそんなこと考へてる場合ぢゃない。こはぐつと堪えて、あたしの王子様になんとか自分の可愛らしさをアピールしておかねば……。

「ゆみ子ですう、どうぞよろしくですう」

「俺、高木隼人といいます。ケンジとは中学時代の同級生で、高校は別々だけれど、このあいだばつたりゲームセンターで再会して、その後なぜだかこんなふうに君と会う約束しちやつて……。俺、インターハイ出れなくなつて、ちょっとへこんでたんだけど、でもおかげでキミみたいな可愛い子と知り合つことができて、こいつのケガの功名つていうのかなあ、なんて……とにかくよろしくね」

そう言つて、彼は真っ白い歯を見せながら笑つた。その少年のよくな笑顔が、あたしの無防備なハートを撃ち抜いた。ずつきゅーん

！ そして、あたしの脳内BGMは、ワルツからサンバへと変わった。
…………。

つづく……。

高木くん、きっとサッカーの話しかしないだらうなって思つて、昨日は一夜、づけでサッカーの知識つめ込んできたけど、でも意外なことに、彼はサッカーの話題にはほとんど触れなかつた。あたしたちのお喋りはもっぱら学校生活のことからはじまり、最新のファッショングやヒット曲、それから美味しいスウェーツを食べさせるお店に芸能ネタへと、とりとめもなく移り変わつていつた。その間じゅう、彼はあたしたちの薄っぺらな話題にも難なく調子を合わせ、巧みに相づちを打つては場の雰囲気を盛り上げた。ときおり沙織が哲学的な話題なんかを振ると、高木くんは彼女が舌を巻くほどの博識ぶりを披露してあれこれとウンチクを語り、あたしたちを驚かせた。とにかく頭の良いひとだなあと感じた。

あと、これはあたしの直感なんだけど、彼、意外と女の子慣れしてるかもしれない……。

まあ、それも当然と言えば当然、このルックスだもんね。育ちだつて良いし、モテて当たり前つて気もする。可哀想に、横にならんだケンジがえらく霞んで見えた。てか、こいつの場合、基本的に下ネタかおバカな話しかしないし……。

話も盛り上がりようやく彼ともうちとけてきたところで、がらりとカートを転がしてウェイトレスがやって来た。

「お待たせいたしました」

テーブルに次々と料理をならべてゆく。

グリルド・チキンとマッシュルームのサンドイッチ。

ほうれん草のクリームパスタ。

シーザーサラダ。

ストロベリー チーズケーキ……。

だ、だれだ、こんなに食ついやしん坊は？ あたしだ……。

すべての皿が、あたしの目の前にならんだ。せつかく高木くんの

前でおしどやかに振る舞つて可愛らしさを演出していたのに、あたしつてば大ピンチ。冷や汗を流しながら、この状況をどうつオロ一したらいいか目をつぶつぶわせていると、見るに見かねた沙織が助け舟をだしてくれた。

「あれれ、ゆみ子そのパスタとケーキ、あたしがオーダーしたやつじやん」

「え？ ……ああ、そうね、あのウェイトレスさん、これぜんぶ、あたしが食べると思ったのかしら？」

「だよねえ、これからデートするつてのに、こんなにいっぱい注文するバカいるわけないじやんね」

沙織が、にやりと意地の悪い笑みを浮かべる。「……、やな性格。やや引きつった顔で作り笑いするあたしの前から、パスタとチーズケーキが引つぱられてゆく。ずりりり。……ああ、あたしの愛しいストロベリーチーズケーキ。とろふわの食感と口のなかで広がる甘酸っぱい味覚を想像して、少し悲しくなつた。でも沙織の友情には素直に感謝しなくちゃね。彼女にむかつて目で「さんきゅ」つてお礼を言つと、同じくむじうも目で「当然こここの支払いは、あんただからね」と返してきた。はいはい、分かつてますつて。

そんなあたしたちのようすを、高木くんは、なに言つでもなく終始にこにこと見つめている。やだなあ、なんか彼にはぜーんぶお見通しつて感じ……。このていどの料理、ふだんなら大口あけてあつという間に平らげてしまうんだけど、王子様の視線を意識するあまり、食べ終えるまでに倍以上の時間をかけてしまつた。それでもサンディッシュとサラダの味をじゅつぶんに堪能し、満足げな顔をしていると、ふふつと笑いながら高木くんが言つた。

「ものを美味しそうに食べる女性つて素敵だね」

「え？」

「やだなあ、あたしつてば、そんなに意地汚い顔して料理食べてたのだろうか……。

「最近はプロポーションを気にしてちゃんと食べない子が多いけど、

本来、女性の美しさってのは日々の健康のうえに成り立つていて思つんだ。それにものを食べる仕草って女性のチャームポイントのひとつでもある。料理を美味しそうに食べる女の子って、ほんと可愛いこと感じるよ」

まじっすか！ 高木くんじてば、まじっすか！ 良いこと言つなあ、なんか嬉しくて泣けてくるよ。こんな食いしん坊のあたしのことを肯定するような発言。おお、神よ、このよつたな素晴らしい男子とお引き合せくだされたことを、わたくし生涯かけて感謝いたします、あーめん。……こんなことならパスタとケーキ、沙織にあげるんじやなかつたな。

なごやかに食事も済んだとこりで、沙織があたしと高木くんを交互に見ながら、にやけた顔で言った。

「それでは宴もたけなわではあります、あとは若い一人にまかせて、あたしたち邪魔ものは退散するとしますかね。うひひ」

「いらっしゃ、あたしたち同じ高校一年じやん。てか、なによそのいやらしい笑いは。

やがてあたしたちは、四人そろつて店を出た。

外は相変わらずぴーかんのお天氣で、照りつける陽射しがちりちりとうなじを炙り、わきの下や背中からふわっと汗が吹き出していく。それでも午後になつて少し風が出てきたみたいで、街路樹の枝をすき間なくうめる青葉がしゃらしゃらと揺れ、生暖かい風があたしの頬をなでてゆく。よく見ると、ずっと東の果てにもくもくと入道雲がわいていた。吸い込んだ空気がむつとするよつたな湿氣をふくんでいる。もしかしたら今夜は雨になるのかな……。

「じゃあなケンジ、今日はサンキュー」

高木くんが、ケンジに向かつて包帯の巻かれていないうつる拳を突き出した。ケンジがそれに自分の拳をちょんとぶつける。

「おっ、そのうち氣が向いたら電話でもくれや」

「分かった、きっとするよ」

そしてお互に白い歯を見せ合つて笑つた。うんうん、青春だねい。

ちなみにケンジは、相変わらず前歯が一本欠けている。いい加減、差し歯入れろって。

「沙織、いろいろとありがとね」

白いノースリーブのワンピをお洒落に着こなした沙織に向かって、心からお礼をのべる。すると彼女は、ガツツポーズをつくつて意味ありげにウイinkしてきた。

「ゆみ子、ふあいと」

「うん、ありがと……」

スカジヤンの内ポケットから取り出したタバコをくわえ、火を付けようとするケンジの頭をぴしゃんと叩いておいて、沙織はバイバイと小さく手を振った。そのまま一人して、あたしたちに背を向け駅のほうへと遠ざかつてゆく。仲良くならんだ後姿がファッショビルの角をまがる瞬間、ケンジが沙織の肩に腕をまわし自分のほうへぐいっと引き寄せるのが見えた。なんだかんだ言つてあの二人、けつこうお似合いなんだから……。

ちょっと羨ましいなって思いながら、あたしは高木くんの顔をそつと見上げた。彼もあたしを見下ろし優しく微笑みかける。うん、この身長差がベリーグリ、少女マンガに出てくる恋人同士みたいで、ちょっと良い感じ。

「さてと。ゆみ子ちゃん、僕らはこれからどうしようか?」

高木くんが言った。あたしは、つとめて控えめな女の子を演出しながら、少しばにかんで見せた。

「あの……高木くんにぜんぶお任せします」

「じゃあ、とりあえずこの辺をぶらぶら歩きながら考えよっか」

「うん」

さつき出会つたばかりだし、手をつないだりなんてことにはならないだろうなって思つたけど、万が一ということもあるので、あたしは高木くんの右側を歩いた。彼、左手ケガしてるから……。でも、まるでそんなあたしの下心を見透かすかのように、彼はごく自然に指をからませてきた。びっくりして一瞬身を固くしたけれど、でも

いつの間にか一人は手をつないで歩いていた。最初見たとき、彼のことウブで純情なスポーツマンだとばかり思つてたけど、なかなかどうして、かなり女の子の扱いには慣れている。ひょっとして、ものすごいプレイボーイだつたりして……。

雑居ビルのならぶ駅裏のせまい路地には、商売をあきらめてシャツターや下ろした店もけつこづ多いけれど、思い出したよつにぽつりぽつりと若者向けのブティックやら雑貨店が顔をのぞかせている。そんなお洒落でどこか怪しげなお店を一軒ずつ冷やかしながら、あたしたちは肩を寄せ合つて歩いた。ときおり女の子の子どうしのグループなんかに行き合つと、きまつて羨望のこもつたまなぞしをこじらへ向けてくる。うん、やっぱ高木くんつて、存在感ばつぐん。ちょっとだけ優越感に浸つて、るんるん、浮かれ気分になつた。

やがてめぼしいお店はあらかた見終わり、一人してクレープ屋のベンチに腰掛けてソフトクリームをなめてるとき、高木くんが言つた。

「俺さ、親からは医者になれつて言われてるけど、本当はもつと違うものになりたいんだ」

そつと高木くんの顔を見る。彼は、ほんやりとした目でどこか遠くのほうを眺めていた。その顔が妙に大人びていて、あたしはまた少しじきつとした。

「高木くん、将来はサッカー選手を田さすんじゃないんですか？」

「まさか、そこまでの実力はないよ。うちの学校は県大会でさえ優勝したことないし、それにプロのサッカー選手めざしてるすぐつなんて掃いて捨てるほどいる。俺なんかじゃ、とてもとても……」「うーむ……じゃあ高木くんのなりたいものつて、一体なんだろう？」溶けてくるアイスクリームを必死に舌先ですくい上げながら、あたしはあれこれと想像をめぐらせてみた。……分からん。

「ねえ、笑わない？」

高木くんがあたしを見る。

「え……、ええ、もちろん」

あたしも高木くんのことを見つめ返す。

「じつは俺、ガキの頃からずっと宇宙飛行士になりたかつたんだ

つ、びく……。

「 星が好きなんだ」

白い歯をのぞかせて、高木くんは笑った。それから、うーん、ん、んと伸びをして胸一杯、夏の空を吸い込んだ。白く反らせた喉がやけに尖つて見える。あたしもそのまま、ゆっくりと視線を上げた。きれいに澄み渡った紺碧のグラデーションが、どこまでも果てしなくつづいている。飲み込まれそうなくらいの天空の高み、それはそつくりそのまま宇宙の色をしていた……。

「 いつの日かスペースシャトルに乗って大気圏の外へ飛び出してみるのが俺の夢さ。上下左右、三百六十度ぐるっと星の海に囲まれながら、地球に残してきた恋人のことを想う。ああ、あの青い星のどこかに自分の愛するひとがいるんだなって、今じろ空を見上げて俺のことを思い出してくれているのかなって……。子っぽいかな、こうこうの？」

「 うーん、子ビもっぽくない……」

高木くんつて、めっちゃロマンチスト。

高校二年ともなると、卒業後の進路が絶えず頭のなかをかすめる。なにげない雑談の合間にも、将来はなんの仕事がしたいだの、どこそこの企業に勤めたいだのという話題がひっさりなしに飛び出していく。それまで漠然と思い描いてきた子ビもっぽい夢とか、そんなものはかなぐり捨てて、真摯な気持ちで現実と向き合ってはじめる。でも夢は夢として、ちゃんと心のどこかへ仕舞つておきたい。その夢が叶うとか叶わないなんてのは、ぜんぜん別の話。やがて高校を卒業して大人になつても、ずっと胸に秘めていたその思いは、きっと自分自身を支える強さとなるはず。

高木くんは、ちゃんと自分の夢を持ちつづけている。すじいなあと感心してしまつ。自分はどうだろう、なにか夢と呼べるものがあるだろうか。いつの間にか田の前に敷かれているレールに沿つて、

なんの疑いもなく、ただなんとなく足を進めているだけではないだらうつか……。

そんなことを考えながらソフトクリームのコーンを口のなかへ放り込むと、まさにそのタイミングで高木くんが言った。

「そうだ、これから星を見に行かないか」

思わずザザエさんのエンディングみたいに喉を詰まらせ、目を白黒させた。んが、ぐぐ……。

「あれ、大丈夫？」

「……だ、だいじょぶ、です、けほつ、けほつ」

あやうくアイスを喉に詰めて窒息死した日本初の女子高生になるところだった。世の中どこに生命をおびやかす危険が潜んでいるか分からぬい、くわばらくわばらく……。

「えと、星……ですか、こんな昼間に？」

「もちろん本物の星じゃなこせ。プラネタリウム、俺の手作りなんだ」

言ひが早いか彼はベンチから立ち上がり、あたしの手を引つぱつた。

「ねえ、行こうよ、とつても綺麗だよ。きつと頬も氣に入ると思つからさ」

「あの、でもここにあるんです、そのプラネタリウムつて……」「ここからだと歩いても十分とかからないよ、とつておきの秘密の場所があるんだ」

どうしたものかと逡巡したけど、でも特に予定があるわけじゃないし、それにプラネタリウムつてなんか涼しそうな言葉の響きがある。あたしは黙つて彼について行くことにした。

猥雑な雑居ビルのすき間を縫つて駅とは反対のほうへ歩いてゆくと、しばらくしてこの界隈でもひときわ寂れた場所に出る。まず目につくのが、潰れたボーリング場、それから同じく営業をやめて久しい廃墟のようなパチンコ店。ここは駅裏商店街を区画する地域のなかでもっとも辺境にあたり、県道を隔てた向こう側には、もう町

工場や運送会社の倉庫が建ちならぶ工業地帯が迫っている。かつてはその工業地域を大々的に宅地化して売り出す計画があり、今あたしたちが立っているこの場所も一大ショッピングモールへと生まれ変わる予定だつた。ところが政治家先生の気まぐれか、それとも不動産業者の思惑なのか、ある日とつぜん宅地開発は中止となりすべては砂上の楼閣と化した。そしてそのときから、ここいら一帯は急速に寂れはじめたのだ。

「……え、このビルなの？」

それは、路地からさらに奥まつたせまい敷地にひょろりと建つ、七階建てのテナントビルだつた。ただし無人の廃墟ビル。一階の窓ガラスはすべてメチャクチャに割られ、その上をベニヤ板でやみくもに塞いでいる。正面入り口にある回転式ドアには木材をばつてんに打ち付けてあり、もちろん人が出入りできる様子はない。あたしは心配になつて、高木くんを見上げた。

「ねえ……、ここ入れないよ」

「だいじょうぶ、建物の裏側へ回れば勝手口が開いているから。俺いつもそこから出入りしてるんだ」

「でも、無断で入つたりして怒られないかな？」

「心配ないよ、ここはずつと以前にオーナーが夜逃げしてしまつて、そのまま競売にもかけられず長いあいだ放置されているんだ。まあバブルが生み出した負の遺産つてどこかな。建物のなかは、まつたくの無人だよ。こんな汚いビルだれが好きこのんで入るもんか」

そう言うと高木くんは、せまい通用門をまたいでずんずん奥へと入つてしまつた。一瞬、躊躇したけど、でもせつかくここまで来たんだし、それに内部はかなり涼しそうだったので、あたしもミニスカートのすそをひるがえして、ちゃちなアルミ製の門を乗り越えた。ビルのなかは、まさに廃墟だつた。廊下や階段には「ミヤガラスの破片が散乱して、一步踏み出すごとにしゃりつと鋭利な音を立てる。予想どおり空氣はひんやりしていた。でもなんだか埃っぽくて、おまけにカビ臭い。ちょっと心細くなつて、あたしは高木くんとは

ぐれてしまわないよう必死になつて後を追つた。

やがて、四階の一番奥にある扉の前まで来ると、彼は立ち止まつて振り向いた。

「ほら、ここだよ」

かたむいて外れかけた看板には、レンタルビデオ・スカイとあつた。試写室完備、一時間六百円……。見たところ、ドアにも壁にもいつさい窓がない。代わりに色あせたポスターが何枚もべたべた貼られている。ゼーンぶアダルトビデオの宣伝。なんか、ものすごくいかがわしい感じのする場所で、思わずうえつて声が出そうになつた。

「ここは外から光が漏れない造りになつていてるから、プラネタリウムを見るにはうつてつけの場所なんだ」

「……ふーん」

高木くんはドアノブに手をかけ、ゆっくりと引いた。カギはかかっていない。ぎぎいといつと錆ついた音を立てて重たいドアが開いてゆく。たしかに彼の言うとおり、なかは一切の光が遮断され真っ暗だつた。廊下から刺し込む光の帯だけが、部屋のなかを漂う埃をきらきら光らせている。入つてすぐ正面がレジカウンター、そこから奥へむかつて店舗と試写室がつづいているようだ。なんのためらいもなく、高木くんの姿はその暗がりのなかへすつと吸い込まれた。

「ああん、待つてよ」

あわてて、あたしも後を追つた。背後でがちゃりとドアの閉まる音がした。と同時に、部屋のなかは濃密な闇の世界となつた。窓はどうやらなにかを貼り付けて塞いでいるらしく、すき間からわずかな光が漏れさし込んでいた。その微細な明かりが、店舗内部の輪郭を薄ぼんやりと浮かび上がらせる。

「……ねえ高木くん、どこ?」

返事がない。目を凝らして、彼が消えた辺りを凝視してみる。きっと悪ふざけして、どこかへ隠れているんだろう。あたしのことを怖がらせようとしたつてダメ、その手には乗るもんか。そんじょそ

「こちらのキャーキャー煩いだけでからつきし根性のない女子高生と一緒にしてもうつては困る。あたしはいつもだつて行動派なのだ。

打ち捨てられたまま床に散乱しているビデオテープにつまずかないよう気をつけながら、あたしはそろそろと探るような足取りで奥へと進んだ。だんだん目が慣れてきて、店舗の部分はさして広くないことが分かった。でも高木くんの姿は確認できない。店のさらに奥は廊下になつていて、その両側に試写室とみられる小部屋のドアがならんでいる。きっとあのどこかに隠れて、あたしが怖がっている様子を楽しんでいるんだろう。けっこつ悪趣味なひとだ。

そのときあたしは、ふとある違和感を感じた。タバコのにおいがするのだ。かなり濃密に漂っている。かつてその場所で誰かが吸っていたとか、そういうレベルじゃない、今日の前で煙を吐き出しているつて感じだ。まさか、高木くんが吸っているのかな……？

そのとき闇のなかで、もぞりとひとの蠢く気配を感じた。高木くん？ 違つ……、しかも一人じゃない。はつきりとは見えないけど、部屋のなかにだれかが潜んでいる。

「……だ、だれかいるよ。ねえ高木くんつてば、こじだれか他のひとがいるよ」

答える代わりに、くつくつと噛み殺すような笑い声が聞えた。あたしの正面から、右奥から、左の後ろからも。

どこからともなく、おどけた感じの男の声がした。

「おーい高木い、またプラネタリウムつてかあ？ めえもワンパターンなやつだな」

四方から、いつせいに笑いがおこつた。

やばい、だまされた。

恐怖を感じ、全身がぞうつとおぞ氣だつた。すぐに逃げなきや。あたしは身をひるがえし、自分が今入つてきたドアへと急いだ。

「おつと、逃がさねえよ」

「ひつ」

すぐに後からだれかが追いかけてきて、あたしの腕をつかんだ。

○...うるく

パラネタリウム（後書き）

ああ、ゆこたん危うしー。
もしかして、あーんなことや、こーんなことわかれいやうかも（＊）
とこつわけで、この連載はノクターンのほうへ移動します（つや）

あたしつてば、大ピンチ！

「やだ、ちょっと離してつたら」

あたしは、後ろからつかみかかってくる相手の腕を必死に払いのけながら怒鳴つた。こうこうときつて、きやー、とか声出ないもんだ。闇のなかに目をこらし、追ってきた男の黒いシルエットを睨みつける。自分でも驚くほど冷静に声が出た。

「なんなのよ、あんたら。あたしのこと待ち伏せしてたつてわけ？ ばつかじやないの、こんな真つ暗な、しかもゴミダメみたいな汚い部屋のなかで」

相手の口もとあたりで、ふつと空氣の動く気配がした。どうやら笑つてゐるらしい。なにか喋りつづけていないと恐怖でパニックを起こしそうなので、あたしはひとわらひ語氣を荒げて口汚くのじつた。

「だまして、こんなとこへ連れ込まなきゃ女の子に相手してもらえないなんて、可哀想なやつらね。どうせ口の当たる場所じゃ晒せないようなちょー不細工なツラしてんでしょう、キモつ、まじキモつ、こんな手の込んだことしてねーで大人しく家に帰つてマスターべーシヨンでもしてろつて、このチンカス野郎っ」

突然皿の前で「ECHO」が点灯し、まばゆい光があたしの皿を射た。どうやらペンライトであたしの顔を照らしているらしい。瞳孔がすつと窄まり、暗闇に慣れていた目が痛みを覚える。光線を手で遮つて顔をそむけると、とたんに嬉しそうな声がした。

「おっ、この子すんげー可愛い顔してるじゃん」

「どれどれ」

右からも左からも、ペンライトの明かりが無遠慮にあたしの顔を照らす。

「おっ、まじ可愛い。やつたな高木い、お手がり、お手がら」

「でしょ、今日はなかなかの掘り出しあんだと思ってるんだ」

高木くん改め、高木のクソッタレの声だつた。

「今日ははつて……あんたたち、いつもこんなバカなことやつてんの？」

「へへ、ダメされて、のこのこついてくる間抜けな女が多いもんですね」

「そうそう、飛んで火にいるなんとやら」

別の男が、くくつと笑いを噛み殺した。その口もとあたりでタバコの火が揺れる

「……だけどよつ、この前拾つてきた女はブスだつたよな。ネズミみたいな出つ歯で、おまけに俺らの姿見たとたん小便垂れやがつて。後で掃除すんの大変だつたもんなあ」

周囲でいっせいに下卑た笑いが起つる。こいつらつて最低。後で交番へ駆け込んで洗いざらいチクつてやる。でもそのためには、なんとかしてこの場から逃げなきや……。

「べつに怖がらなくともいいんだよーん」

いきなり男の一人が背後から抱きついてきた。左耳の後ろあたりにくんくんと鼻を押ししつけてくる。不快な口臭と汗のにおいを感じて全身に鳥肌が立つた。

「きやあ、なにすんのよつ」

「おつ、ここの子けつこつ胸デカいぜ」

その男は、調子に乗つてあたしの乳をわしづかみにした。腕を振りほどこつにも、圧倒的な腕力の差に押さえ込まれてびうにもならない。

「やだつてば、はなしてつたら」

「おお、このおつぱいの揉み心地、たまらん」
許せない。

かつと頭に血がのぼり、気づいたときには後頭部で思いつきりそいつの顔面に頭突きを食らわしていた。

「ぐわつ……」

もろに鼻に入ったみたいで、「すつと鈍い音がした。あたしに抱

きついていた腕から一瞬だけ力が抜ける。今だつ！ 肩で思いきり男を突き飛ばし、身をひるがえして夢中で駆け出した。とにかくこの部屋から出よつ。そうすれば、廊下の窓を叩き割つてでも助けを呼ぶことができる。

「あつ、こら待て」

いくつものペンライトの明かりが、脱獄囚を搜索するサーチライトみたいにあたしを追いかけてくる。どによつ、出口どによつ。さつき自分が入ってきたあたりを田ざして懸命に走る。お気に入りのパンプスが片方脱げたけど構つてられない。ついでにバランスをくずして床に転がつているイスに脛をぶつけたけど、痛がつての場合じやなかつた。なにせ今は、あたしの純潔がかかつてているのだ。暗いなか、壁に激突してしまわないよう部屋の間取りを探りながら必死で走る。すぐにキャッショレジスターを乗せたカウンターが薄ぼんやりと見えてきた。

やつた、出口あそこ。

そう思つたとたん、いきなり斜め後ろからタックルされた。二人もつれ合いながら勢いよく床に投げ出される。

「きやあつ」

倒れたひょうしになにか硬いものに頭を打ちつけ、まぶたの奥で火花が散つた。

「痛あーい」

「逃がすかよ、このアマ」

「はなしなさいよ、くそつたれ」

「うるせえつ、俺たちをナメんな」

男は腕力であたしを仰向けにねじ伏せると、お腹のうえに馬乗りになつて勝ち誇つたように言つた。

「へへへつ、もう逃げられねえぞ、このバカ女ちよつしコキやがつて。……効いたぜえ、今の頭突きはよお

そう言つたかと思うと、いきなり腕を振り上げてあたしの頬を張つた。

ぱしんつ、一発。

「ひつ」

ぱしんつ、一発目。

「べべ……」

口の中に、じんわりと血の味が広がってゆく。ついでに涙もこぼれた。

「手こずらせやがつて」

そこへ他の連中もやってきて、みんなで倒れているあたしを取り囲んだ。一斉にペンライトの明かりが顔に浴びせられる。くそつ、泣いてるところ見られた。

「逃げ足早えーな、この女」

「わつわと奥へ連れていこうぜ」

「よし、お前ら手え貸せや」

お腹のうえに馬乗りになつていた男が立ち上がり、あたしの両足首をつかんだ。すかさずもう一人が両手を持った。そして二人掛かりであたしの体を持ち上げ、部屋の奥にある廊下へと引きずつてゆく。冗談じやない。身をよじつて必死に暴れる。とたんに横つ腹にケリを食らつた。

「ひぐつ」

「騒ぐんじゃねえつ」

あまりの痛みに体が硬直した。苦しくて息ができない。てゆーか、ふつう無防備な女の子の体にケリ入れるか？ 痛いのと悔しいのとで、また涙が出てきた。……あたしこのまま、こいつらにヤラれちゃうんだろうか。やだやだ、絶対にいやだ。負けるなゆみ子、諦めたらお終いだ、あたしは女の子の意地と貞操をかけて最期の最期まで徹底的に抗いつづけるんだ。

「わーっ、うひーっ、むもーっ！」

虚しい抵抗とは分かつていたけど、メチャクチャに体を捻りながら大声を出して懸命にもがいた。

「ばーか、叫んでもムダだつて。この部屋の壁には吸音板が貼つて

あんの」

「頭悪いんじゃねえか、こいつ
ちくしょう、バカにしやがって」。

ようし、そんならこいつらの前でゲロ吐いてやる。思いつきり、うえーって吐き散らしてやる。さつきこっぽい食べたから吐く自信はあるぞ。サンドイッチに、サラダに、アイスクリーム……。さすがにこいつらだって、ゲロまみれの女を犯す気にはならないだろう。よしよし、吐くためになにか気持ちの悪い食べものでも想像してみよう。えーと、なにが良いかな。

例えば、味噌汁に納豆を入れてみる……とか。

あ、これだと普通に食べられるな。

そんじゃ、カルピスに青汁混ぜて飲んでみる……とか。

なんか抹茶ラテみたいで美味しそう。

つて違う違う、あたしのバカつ、食いしん坊、もつとハードコアに気持ち悪いもの想像しなきゃダメじゃない。例えば犬のうんちのハンバーグとか、使用済みナップキンの天ぷらとか、おじいちゃんの入れ歯の酢の物とか……。

ううう、あんまりおバカなこと想像してたら、気持ち悪いってよりもだんだん落ち込んできた。

両側にビデオの試写室がならぶせまい廊下の突き当たりに、明らかに他の部屋とは作りの違うアルミ製のドアがあつた。事務所だろうか。男たちはそのドアを引くと、いっし、にの、さんで勢いをつけてあたしをなかへ放り込んだ。

「ひやあっ」

一瞬だけふわりと体が浮き上がり、すぐにどすんとお尻から落ちた。痛つたーい……もうちよつと丁寧にあつかいなさこよ、くそつたれ。

どうやらその部屋は倉庫として使われていたらしく、古ぼけた段ボール箱がいくつか積まれている他は、がらんとしていた。コンクリートむきだしの床にはマットレスが一枚、無造作に敷かれている。

その上に乱暴に転がされたあたしは、それでもすぐに起き上がりつてめぐれたスカートをなおした。そして横座りの姿勢のまま、ずり下りと後ずさつて壁ぎわにぴつたり身を寄せた。

部屋のなかには「LED製のランタンがひとつだけ置かれていた。キャンプなどで使うごついやつだ。その明かりを頼りに、あたしは改めて男たちの顔ぶれを一人ずつ確認してみた。光源が低い位置にあるせいで、どの顔も酷薄そうに見える。そして妙なことに気づいた。

「いや、金剛で四人一組。

男は全部で四人いた

一人は、高木のクソッタレ。あとの三人は、顔じゆうニキビだらけの背高のつぼと、タバコをくわえた茶髪のデブ、それに体育会系っぽい筋肉ムキムキのハゲ。このハゲは鼻から血の垂れた痕があった。さつきあたしが頭突きを食らわせたヤツだ。

どいつもこいつも、なんて人相の悪い。まるで道徳や社会秩序など、いつも思つて、ミセッタ二つ、うれ、ほほのニン。

あたしの頭のなかで、つごじの間の出来じとが鮮明にフラッシュ

思い出した。

「あーっ！」

目の前に居並ぶ男たちを指さして叫んだ。

「あんたたち、電車のなかでヨウスケを襲つた痴漢ーっ！」

そう、こいつらは、あたしが初めてヨウスケと出会ったあの日、

強效魔

ゆくつと視線をめぐらせ、高木のケソッタレを見上げる。

あんた、その手……サッカリて怪我したなんて嘘でしょ！」

戦闘開始、ブタのケツーつ！

理知的だなあ、なんて思つていた高木のクソッタレのクールにひきしまつた口もとがゆがんだ。あまり血の通つている印象をあたえない、赤みの薄い唇。今こうしてあらためて見ると、キザでいけ好かないナルシズムの象徴みたいに見えた。その酷薄そうな唇が、きゅつと醜くゆがんだまま微かに震えていた。

「……お前、なぜ知つている？　俺の指をへし折つたあのバカ女のことを、なぜ知つているんだ？」

おつと、かなり動搖してますね。しめしめ、ここは一番こいつをもつと動搖させて、精神的優位に立つてやる「じやないの。そうすれば、ここから逃げ出すチャンスもめぐつてこようといつもの。ようし見てろよ。……今にぎやふんと言わせてやる。

あたしは、わざといきがつて鼻で笑いながら言った。

「ふふん、知りたきや教えてやるわよ。あの子はねえ、あたしの一番のマブで、しかも恋人なの。いい？　もしあたしにひどいことしたら、あの子は絶対にお前らのことを許さない。一人ずつ草の根分けても探し出して、徹底的にぶちのめしちゃうんだから」

そこまで一気に言つと、高木のクソッタレの顔をきゅっと睨みつけた。負けちやダメだ、こんなやつらの好き勝手にはさせない。ところが罵倒されて逆に開き直つたのか、この痴漢野郎はあたしを見下ろしながらせせら笑いやがつた。

「へえ、そりゃいいや」

ふつと部屋のなかに凝つたカビの臭いが動く。つかつかと、高木のクソッタレが近づいてくる。

「ちょうど俺も、あのバカ女にはもう一度会いたいと思つていたところなんだ」

そう言つてあたしの髪の毛をわじづかみにした。

「こつー」

「あいつにこま、マジで恨みがあるからな」

ぎりっと奥歯を噛みしめたかと思うと、あたしの頭を「じんじん壁に吊り付けた。痛てててつ、やめろ、これ以上バカになつたりびつする。

「お前を痛めつけると、あいつが怒つてしゃつて来るわ? そりゃあいいや、じゃあこれから、お前をす」「ーくひじに田にあわせてやる」にいつと笑つて、つかんだ髪の毛」とあたしの頭をきりきりとねじり上げた。

「……やつ、ちょっとやめてよ、痛いじゃないの」

思わず苦痛で顔がゆがむ。その鼻先に自分の口を近づけて、高木のクソッタレが言った。

「裸にひんむいて、その可愛いケツを嫌というほど蹴り上げてやる。ひひひつ、その後はお待ちかね、レイプの嵐だ。もちろん、ただ犯すんじゃないぞ、その様子をビデオカメラで撮影してやる。もしお前が親や警察にチクつたら、その映像は全国へ向けて発信されることになる。お前のアヘ顔がネットじゅうに流れるんだ。どうだ、愉快だろ?」

正直、体が震えた。泣いて許しを請いたい衝動に駆られる。お願ひ、それだけは許してください、と言つて足下にすがりつきたい。でもそれはできない。そんなことをしたら……こいつらの暴力に屈したら、あたしはもう、あたじやなくなる。

べつにフェミニズムとか関係ないけど、あたしは女の子であるがゆえに踏みにじられるというシチューーションが我慢できない。レイプだのドメスティック・バイオレンスだのつて絶対ありえない。そういう言葉を耳にしただけで、もう暴れたくなっちゃう。ケンカとかめちゃ弱いけど、頬つぺたビンタされただけで泣いちゃうかもしれないけど、でも男子が女子をむりやり腕力でねじ伏せて乱暴するなんてそんな行為、マジで許せない。こいつらこま、そのことを思い知らせてやる。今までいつたい何人の女の子にこんなヒドいこ

としてきたのか知らないけど、せつと被害者の子たちはみんな怖くて泣き寝入りしてゐるんだろうと思つけど、でも女の子のなかには手負いの獣みたいに反撃してくるやつだつてことを思い知らせてやる。

「ゆみ子は、ほんとうにお嬢さんね……」

死んだお婆ちゃんの、ちょっと困つたような笑顔が目に浮かぶ。しわしわ、くしゃくしゃのお婆ちゃんの笑顔。あたしつて小さいころから、ずっとお嬢さんつ子だつた。学校でケンカして泣きながら帰つてきたりすると、あたしは真つ先にお婆ちゃんの部屋へ駆け込んだ。

「あれあれ、女の子なのに、じつじつ意地つ張りで無鉄砲なんですよ」

あたしを膝のうえに乗せて優しく頭を撫でながら、でもお嬢ちゃんは最後には必ずこいつ言つてくれた。

「でも、そんなゆみ子のこと、お嬢さん大好きよ」

負けない。

あたしは、絶対に負けない。

女の子は、男どもの下劣で思い上がつた暴力に負けちゃいけない。痴漢だか強姦魔だか知らないけど、そんな人間のクズみたいなやつらの暴力に屈するくらいなら、女の子なんてやめたほうがましだ。最初に襲いかかってきたやつの喉笛に噛み付いてやる。歯の丈夫さには自信あるぞ、いつもピカピカに磨いているからな。スルメだつて、塩せんべいだつて、梅干しの種だつて、躊躇せずにバリバリ噛み碎くことができる。じつらの喉を食いちぎるなんて朝飯前だ。さあ来い、来てみろ、お前らにスプラッターな恐怖を思う存分味わわせてやる。

あたしは悲壮な決意をして、横座りの姿勢のままぐつと身構えた。

高木のクソツタレは、用意周到なことにデジカメを持参していた。ほんとにビデオ撮影する気だな、てめー、鬼、悪魔つ。いっぽう、のっぽとハゲとデブの三人は、欲情にきらきら目を輝かせながら、

だれが一番最初にあたしへ襲いかかるかを話し合っていた。

「この前バスをヤッたときには、たしか俺が最後だったよな」とのつぽ。

「一番目は暴れるから大変なんだぞ。いいから俺に任せとけて」とデブ。

「あの女には頭突きを食らわされた恨みがある。まずは俺にやらせろ」

とハゲ。

「おうい、撮影の準備ができたぞ、だれでもいいから早くしろ」

これは高木のクソッタレ。

ふざけんな。ひとをなんだと思つてやがるんだ。やつぱりスキを見て逃げちゃおうかな。こいつら突き飛ばして遮一無一走れば、あるいは逃げ切れるかもしれない。そう思いなおして必死に頭のなかで逃走経路を思い描いていると、どうやらジャンケンに勝利したらしいデブがあたしの前まで来て、力チャカチャと腰のベルトを外しはじめた。いつたんは覚悟を決めたものの、あたしのひざは面白いほどガクガクと震え出した。ビビッちやダメだ、こいつが油断したことろを喉笛に噛み付いて、敵が動搖したスキに逃げる。今はその一連の動作に集中しなければ……。

デブが、ジーンズをズり下げる。趣味の悪いがらのトランクスから、ふーんとチーズの腐つたような臭いがした。その不快な臭いに思わず顔をそむけたとたん、あたしの心のなかで急に弱気な自分が顔を覗かせた。だめ、女の子はしょせん男どもの腕力には敵わない。むりやり押さえつけられ着ているもののはぎ取られたら、もう抵抗する気力なんて失せてしまうに違いない。どんなに勇気をふりしぼつたって、ここからは絶対逃げられない。

朝、家を出るときに垣間みた両親の笑顔がふつと脳裏をよぎった。

「今夜は手巻き寿司にするから、なるべく早く帰つてこいよ

「あんまり遅くなっちゃダメよ

パパ、ママ……。

ジーンズをひざまで下ろしたデブが、いよいよあたしにのしかかってくる。あたしは半分パニックになりながら、両腕をめちゃくちやに振り回した。

「いやあ、やめてつたら！」

あたしは今にも、うえーんって泣きだしそうだった。

でも、そのとき……。

ふつと視界のすみに、螢の火のようなく微小な光が放物線を描きながら飛ぶのを見た。それは一瞬のことだった。その小さな光は、あたしを見下ろしながらデジカメを構えている高木のクソッタレの背中へすっと吸い込まれた。

突如、やつが着るパーカーのフードのなかで、断続的な閃光と破裂音が起こった。がらんどうの部屋の壁じゅうに反響したそれは、まるでマシンガンを乱射したときのようなすさまじい衝撃となつて、そこにはいる全員の魂を縮み上がらせた。

つづく……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7136/>

女の子のうた

2011年7月5日03時24分発行